
ネギま！ ～二人目と呼ばれた男。～

ノクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～二人目と呼ばれた男。～

【Nコード】

N1949W

【作者名】

ノクト

【あらすじ】

少年は、管理者に選ばれ、世界の抑止力となった。数多く不適合な転生者を『世界』から排除する為に。

その世界の名は「.....」ネギま！。。

この作品は、ネギや、正義の魔法使いに対してのアンチ要素があります。

ネギファンの方はバックキョンシーで回避を。

始まり（前書き）

『とある魔術の死神戦記』が優先されるため、この作品は、更新が中々できないですが。

生暖かい目か、白い目で読んでください。

始まり

side?????

「何処だ……此処は……？」

目が覚めたら全てが純白な世界が広がっていた。

「何で……んなトコいんだよ」

「お前は死んだのだよ」

……何か聞き逃せないレベルの音が聞こえた方を見ると、とあるのアレイスターみたいな人がいた。

「つまり、アンタは神でアンタが俺を作為的に死なしたと…」

「神というのは比喩だ。そうだな……管理者と言っておこう、すまなかつて」反省の色が見えねエンだよッ！！！！」ぐボハア！？」

顔面にドロップキックを咬ます。

「人ブチ殺しとして随分飄々としてンじゃねエか、あア！？」

「ずっ……ずばん……お前をごろぢたのば、理由があつてだな」

鼻から滝のように出る血を押さえてるが、気にしない。

「最近、天使達で死んだ人間を転生させる遊びが流行っているよ。うだ。残念ながらその中に下衆な者が好き勝手しようとするのだよ」

あー、大胆読めた。

「だから俺を世界の修正力としてその屑どもを狩れと？」

「聡明だな、理解が早くて助かる。やはり君を選んだのは正解だった」

面倒だが、コイツは他に選択肢を残す様な奴じゃあ無さそうだな。

「報酬は？まさかタダで働けっつーんじゃないねエだろ」

「ふむ、そうだな。その世界を君にやろつ。」

「……………は？」

すると、してやった的な笑みを奴は浮かべやがった。

「ははっ、流石に君も予想外だろつ。そう、その世界は君の思いのままだ。」

「良いのか？そんな暴挙。修正力に修正力が働きそうだなア」

「それほど転生者が多いのだよ。まあ安心しろ。奴等と原作キヤラの繋がりは無い。」

……………原作？

「……………ちよと待て、その世界の名前教える」

「ネギま」だ」

……………頭抱えていいか？

「何を言う。既に抱えているではないか」

冷静なツツコミ有難うござんしたクソ野郎ツ#

「ははは、どうだ？ハーレムでもやってみるか？」

「んなモン現実に出来る訳ねエだろ…。」

二次創作でみんな目指してるが、アホらしいとはおもわねエのか？

「ハア、それで？俺はこのまま転生者を殺せと？ナイフすら握ったことのない、この俺に？」

「安心しろ。君は管理者である私に選ばれた抑止力。最強の超越者だ。既に『世界』の誰よりも強い。だがまあ、君が望むなら与えるが」

「頼むわ。『君、既に最強。』とか言われても実感ねエしよ」

「ふむ、何がいい？」

そうだなあ……転生者対策　つまり、オタクが欲しいがる能力の上になきゃいけないエからなア。

「よし、決めた」

「では、聞こう」

「NEEDLESSの全てのフラグメント　つまり神の肉体と神の力、『キリスト・セカンド』のスペックをくれ。」

「フム、『PF・ZERO』ボジティブフィードバック・ゼロはどうする？フラグメントがないから何も覚えられないぞ？」

「そこは技や術、固有スキルを対象にしてくれ、後……」

「どうした？」

「杖と剣をくれ」

「宝具が欲しいのか？」

「違う、サーヴァントだ」

いくらスペックが高かろうが、経験が無ければあっさり死ぬかもしれん。

魔術に最も秀でた英霊と、剣に最も秀でた英霊。

この二人がいれば、一先ず安心出来るだろう。

「了解した。後、転生者は来る時代が様々なので、時折指示を出す。」

「了解。ほんじゃまア、行ってくるわ」

「わかった、世界を頼んだぞ。」

「2次元の世界なの？」

「フッ、それを言われると痛いな。」

俺は光に包まれ、消える様に世界に向かった。

.....あ、そういやどこに生まれか聞く
の忘れてたな。

一人目の転生者 (前書き)

タイトルの意味は、二人目のキリスト。という物です。

一人目の転生者。

sideレン

あの後、転生？したんだろうなア。どうやら主人公であるネギの双子の弟として生まれちゃった。

つまり、レン・スプリングフィールドになった訳だ。

そして内在魔力がとんでもない量らしく、大人達は「流石、英雄の息子だ!!」と喜んじまった。

面倒くせエ。

それと、これはとても重要な事なんだが……。

俺の髪は白、目は赤色の、分かりやすく言えば。

………何か………とある魔術の禁書目録
の………一方通行さんにクリソツなんです。

何故!? Why!?

しかも何でか『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』出せるんですけど!?

頼んでねエよ!こんな転生者が真っ先に手エ出しそうな能力!!

しかもツ、俺『魔法無力化能力者』だった!

しかアも!!念じれば『グレートグランドマスターキー最後の鍵』出てきたんですけど!!!

ダイナミスや、アーウェルンクスに見つかったら終わりじゃねエ
か魔法世界!!!

何でよりもよって100年間産まれなかった!利用したい放題
の存在に生まれちゃってんの俺!?

まあ、『フラグメント欠片』は発動出来た。 ツても剣と杖の英霊は未だ現

れず……………はあ。

それと、なんと俺には妹がいる。名前はアリア。アリア・スプリングフィールドだ。

『アイツ』曰く、好きでもないのに転生された、転生者の中では唯一まともな例らしい。原作も知らない様だ。(俺の存在に何の反応もないから)

で、現在、スタンのジイさんの所に来ている。

例の、薬味ネギがファザコンになっちまった出来事だ。

「そうね、あなた達のお父さんはね、とっても有名な英雄……………そうね、ヒーローみたいな人だったのよ」

「ヒーロー？」

「そう、誰もが危機ピンチになったらどこからともなく現れて、必ず助

けてくれるのよ」

「へ、ヒーローかっこいい！ ネカネお姉ちゃんも助けられたことあるの？」

「フフフ、それはひ・み・つ・よ」

この言い方だと、ネカネはあのアホナギに会ったことがあるんだろかな。

可能性としては、俺達兄妹が預けられた時に会ったんじゃないか？

「お兄さま？」

「ん？どうしたアリア？」

アリアは俺の事はお兄さま、薬味の事はネギと呼んでいる。

何でそう呼ぶかは、何となくらしい。

「ネカネお姉ちゃんが言ったのは本当なんですか？」

「違エよ」

「えっ？」

おっと、口が滑った。ま、イイか。

「俺達の父親は確かに英雄だ。だがなア、ナギ・スプリングフィールドは大戦の英雄だ。この意味、分かんたる」

「……………！はいつ！！」

……………よく分かったな。ヒント的な意味だったのだがなア。

何か知らんが、俺がなにか教える度にだが、すごい嬉しいらしい。すごい笑顔だ。

転生者だよな？この娘。

何だ……………この尊敬の眼差しは……………。

皮肉にも、最初の転生者はとても身近にいた。

取り敢えず、排除しない方向で。

金髪幼女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）（前書き）

展開に捻りがない、ご都合全開。

金髪幼女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）

sideレン

薬味ファザゴン化事件から1年たった。

あの後、ナギ^{アホ}の真実をある程度アリアに話していた事を、薬味が知ったか知らないか、明らかに俺を敵視してきた。

まあ、自分のヒーローが、実はアンチヨコ見ながら呪文唱えての魔法学校中退とか言われたらなあ。

別に評価すべき所は評価しただろうが、どっちかっつと、母さん
アリカ王女を尊敬するわ。

それと、アリアが凄く懐いてきた。しっぽがあるならブンブン振ってると、容易に想像出来るぐらいに。

まあ、俺の指導で、自称正義の魔法使いがどれだけ歪なのかは理解した様みたいだ。

転生以前が何歳かは知らんが、基本は誰にでも素直で、可愛いげのある妹だ。

ただ、薬味が俺の悪口を言った時、いつもでは信じられねえぐれエにブチキレた事があった。

俺の悪口に対してキレてくんのは嬉しいんだが、薬味がまるで集団リンチにあった様な状況になったア。

それから、薬味は表立って俺の悪口を言わなくなった。

一体どんなチート押し付けられたんだ？

つか、俺が絡むとアリアの沸点がやたら低くなる。そんな好感度上げるよオなことしたか？

俺は『世界』からのバックアップか知らんが、ほぼ全ての魔法を4歳でマスターした。

フラグメント
欠片も、ミッシングリンク級の能力も完全にマスター出来た。

そんな時、

『レン、聞こえるか？』

「ああ、聞こえるぜ。久しぶりだな、どオかしたか？」

『仕事だ。ある程度の転生者の時間軸を捕捉した。今から向かって欲しいが、構わないか？』

「それが俺が此処にいる理由だからな。今、この時間軸に戻してくれんなら構わねえよ。一応聞いておくが、何時だ？」

『おおよそ、600〜400年前辺りだ。』

完璧エヴァンジェリン狙いだな……。

「転生者はロリコンの変態ばっかか」

『流石に四歳の体ではキツいだろうが、頼む』

オマエって、そういう所は気イ使うよなア。

「気にすんな。それが俺の仕事だ」

『すまない、では送るぞ』

俺は光に包まれ、その瞬間、レン・スプリングフィールドは消えた。

「ここか……………」

俺の意識が戻った瞬間。見たこともない森の中だった。

今はいつだろう、大体ここは何処だ？

「面倒くせエ……………もちっとマシな場所はなかったのかア？」

ザザッ

誰がいんのか？まあイイ、取り敢えず姿を消すか。

「『バミューダスポート』」

コイツは、物体を透明にする能力だ。

認識障害の魔法と合わせれば、姿を隠すにはもってこいだ。

現れたのは金髪の少女だった。何かに追われたのか、足は泥にまみれ、息は荒かった。

成る程、この娘がエヴァンジェリンか。

……俺も人の事言えねエが。

しかし、原作時では見たこともない程、怯えていた。

すると、エヴァンジェリンを囲むように現れる杖を構えた男達。

おそらく正義バカか、賞金稼ぎだろうな。

「やっと追い詰めたぞ吸血鬼。この化け物が」

ピクッ

「何で……私が何かしたんですか！？なにもしていないのに……」

「貴様の様な化け物は存在自体が悪なのだ！正義の鉄槌を受けるがいい！！」

ブチッ

ああ、限界だわ。

エヴァンジェリンに攻撃魔法が放たれ、煙が立ち上る。

「フ……………、フハハハハハ！倒したぞ！！これで私も『^{マジス}立派な魔法使い』だ！！フハハハハハハ」

「黙れよ、ドカスが」

「！？」

イカンなア、アリアの教育上非常にイカンわ。

「だ……………誰？」

「ベタな展開になってきたな。明らかに殺られ役が出てくるなんぢ」

「な……………何だ貴様！？我々正義の魔法使いの邪魔をするのか！？」

「悪いな、明らかに幼女追っかけ回す変態が編隊を組んでやってきたよオにしか見えねエよ」

さアて、判決の時間だ。

金髪幼女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）（後書き）

ヒロイン募集します。

エヴァらアスナと木乃香は決定済みです。

駄文ですが、感想待ってます

600年前で初実践（前書き）

四歳児が饒舌で説教………シユール。

600年前で初実践

sideエヴァンジェリン

私は10歳の誕生日、吸血鬼にされた。

人々からは、化け物と呼ばれ、不老不死で成長しないから、一つの場所に三年は居られない。

ただ見えない刺客から逃げ続ける日々。どれだけ優しくしてくれた人でも、私が吸血鬼である事を知れば、途端に態度が変わる。

私も魔法が使えるれば、幾らかやり様があるけど、教えを乞う人なんて知らない。

そんな時、私は襲撃を受けた。魔法世界の魔法使いが、正義を楯に旧世界に進出してきていた。

勿論私の事も耳に入ったみたいで、賞金をを上げ討伐部隊を作ったと、風の噂で耳にした。

その数日後、私は討伐部隊に見付かった。私に良くしてくれていた人が通報したからだ。

私はどうすればいいのだろう。私は誰を信じればいいのか………
………？

ついに、私は追い付かれて諦めかけた時

。

彼と出会った。

s i d e o u t

s i d e

「君!!ソイツから離れる!」

(おオ、よオやく目の前にいるのが四歳児と気付いたか。オマエ等眼科か脳外科行きやがれ、マジで心配になってきた。主に頭ッ)

「おおい、大丈夫か?目立った傷とか無エけどよ」

レンはアホ共にガン無視を決め、エヴァンジェリンの傷を診た。

「た…助けて……くれたの…?」

「悪いが偶々だ。そりゃア幼女暴行を現行犯で見ちまったんだ、助
けんだる常識的に」

「ありがとう……って、私は幼女じゃないよ!!君の方こそ幼見じ
ゃない!」

実際、エヴァンジェリンは姿は幼女だが、今は20歳を越えた辺りだ。反論したくなるのは至極自然。

「聞け!!!」

無視され続けた男は、確実に聞こえるため、大声で叫んだ。

「何だよ、幼女暴行犯のオッサン。刑務所にまでは同行してやるから、今は黙ってお縄についとけよ」

「誤解だ！ソイツは危険なんだ！離れないと殺されるぞ!!!」

「ハア………で、んなコトすんのか？金髪幼女」

「しないよ!!!だから幼女じゃないよ!」

（つか誰だコイツ、さっきから口調が別人なんだが。
ツ！そうか、きっと厨二病感染前か！ つまり、今からちゃんと教えていけば、あんなサボタージャー娘になる事もない!）

……レンは、何かエヴァンジェリンの将来の事を考えていた。

彼女はちゃんと社会に適合出来る大人になれると考えに至ったのだが。

その社会が糞の掃き溜めなら話は違う。

「危険つーけどよオ、こんな金髪幼女の何処が危険なんだ？俺にはアンタ等の方こそよっぽど危険だと思うんだが？（あの様子じゃア、まだ何もしてなさそうだしなア）」

「君はソイツ正体を知らないから、そう思っただけだ！」

「……………やめて」

「正体？」

「そうだ！ソイツは人間じゃない！！」

「やめて……！！」

それは悲痛。

おそらく、初めて助けてもらえた人に聞かせたくないのだ。

レンにまで拒絶されれば、エヴァンジェリンは完全に絶望するだろう。

「吸血鬼！！それも真祖のだ！分かるだろう、ソイツは化け物だ！！！」

「へエ、だからソンで何？」

と言っても、レンにしてみれば真祖の吸血鬼だろうが何だろうが、害意が無ければ大した意味は無いだろう。

「……………は？」 「えっ？」

「真祖の吸血鬼つつんなら、別に人間を襲って血を飲まねエといけねエ訳じゃねエだろ。しかも本人には何の敵意も無い。一体何処に危険があるつつうんだ？」

「だから……ソイツは化け物で……」

「寧ろ人間より高位な存在。敬うのは判るが、化け物扱いとは……自分より強者は認めようとしな。まあそれは確かに人間の性さがのーつだ」

だがな、とレンは続ける。

「残念だが、それは絶対に正義なんてモンじゃねエよ。そんなモンはただのエゴだ」

少し考えたらわかるはずだ。化け物＝悪、これは絶対に間違ってるとは流石に言えない。しかし、真祖の吸血鬼＝化け物にはならない、そこに心が有る限り。

レンに言わせれば正義バカの掲げるものは、正義どころか偽善ですらない。

「そ、それは…」「オイ、そんなガキの言う事なんて関係ねエだろ。
コイツを殺したら俺達は『立派な魔法使い』マキステル・マキになれるんだ」

先ほどレンのドカス認定を受けたもう一人の男に至っては、その思考は最早善悪以前に屑だ。

「こんなガキ、まとめて殺しちゃまえばいいだ」「オイ、其処のドカス。話の腰を折ってんじゃねエよ」……なんだとクソガキ!!」

故に、負の禁線に触れる。

「ボリユームデカケエ。喧しいんだよピーピーピー嘖ずりやが
つて、小鳥かテメエは!？」

「なッ、テメエ……………殺す!!」

(おやまア、ガキの挑発で殺す……………か。コイツの性根は腐り切っ

てやがるな)

「待て！！その子を殺す理由は無いだろっ！やめ」

「死にやがれ！！『雷の暴風』！！！」

自分の欲に溺れた男は、強烈な風を纏った電撃を放つ。

『雷の暴風』もしレンと同一年の子供が受けたら間違いなく死ぬだろう。

しかし残念ながら、それが魔法である限り、レンには届かない。

レンに当たる前に、消えてしまったのだから。

「なッ……………！？」

『マジックキャンセル
魔法無力化能力』

始祖アマテル末裔、黄昏の姫御子と同じ力。全ての終わり始まりの力。

「オマエは殺意を以て俺に接した。だったら殺される覚悟があるんだろっなア」

レンは、一瞬で男の懐に入る。魔法は使ってない。

純粋な膂力、其だけで、音速に至る。ソニックブームの衝撃をもろともしない神の肉体。

37

そして、『フラグメント神の力』。

「『リトルボーイ』」

レン曰く

地殻すら叩き割る拳が、灼熱の爆撃に

早変わり。皆、周りに気を付けようねッ

男は拳を受けると爆散し、肉片すら蒸発した。

「判決、

死刑」

飛んで火に入る夏のバカ(前書き)

修正しました。

飛んで火に入る夏のバカ

sideレン

予想以上の威力だったな。リトルボーイであの威力か……。エデンズシード解放したら、マジビッグバン起こせそうだなア。

俺は爆散した屑の事など気にも止めず、もう一人の男の前に立った。

「逃げたり抵抗したりしねエのか？」

「無駄……。だろうな。何かしようとしたら僕はアイツと同じ様になっっているだろう」

成る程、幾らかマシか。生かす価値はある。

「……………討伐隊から元老院の老害共に連絡しろ。もしコイツを狙ったりしたら魔法世界ごとオマエ等を潰す、とな」

エヴァンジェリンを指差し、

実際はやる気など更々ないが、ハツタリではない。魔法世界はリライトを研究していけば、おそらく一年で実行出来るだろう。火星そのものを破壊すれば手っ取り早い。

「……………伝えておく」

男はそう言い残し、にその場を離れた。

「さアてと、大丈夫か？」

「はっ、はい。ありがとうございます。助けてくれて……………その……………」

なんか、えらくどもるな。

「どオした」

「こ……………怖く……………ないんですか？私、吸血鬼なのに……………」

「その話はさっき言ったろがよ。そんなモンは関係ねエ、危険度だけだったら俺の方が明らかに高エだろうが」

人間爆砕した四歳児ってのも、恐怖だぜ？

「オマエ、名前は？」

「あっ、エヴァンジェリン、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルです」

「了才解。俺は……………」

このまま本名言ったら不味イよなア。ベクトル操作出来るンなら、一方通行って名乗ってたんだが。

「……………ブレイドだ。つってもコイツは偽名だ。俺は諸事情で簡単に本名名乗れねェンだよ」

「判りました。…そ、それで、貴方はこれからどうするんですか？」

フム、確かにこのままエヴァンジェリンと同行してりゃア、寄ってきた屑共を楽に駆除出来るしなア。

……『アイツ』はこれを考えて此処に送ったんじゃないか？

「……………一緒に来るか？」

手を差し伸べると、まるで奇跡でも観たように涙を流しながら満面の笑みで、俺の手を取った。

「……………ッ、はいっ！……！」

存外、悪イ気はしねエな。

その後、俺達は、紛争地域に行き、怪我人やらやなんやらを治しまくったり、助けした。流石に四歳児の姿はアレなので、『ドッヘルケンガー変身』で姿を12歳くらいに成長した姿でいることにしたが。

そのせいか、「キリストの再来」とか「神の子」とか呼ばれはじめて、漸く自分のやってたことがキリストセカンドと同じ事だったと気付いた（。。。）！

そんな俺と一緒にいるからか、エヴァンジェリンも迫害される事は無くなった。

そして旅の途中　　。

「ブレイド、魔法を教えて!!」

「……それはまたいきなりだア。ンで、何でだ？」

「魔法使いが私達を襲ってきた時、何時もブレイドが助けしてくれるけど、いつまでも守られるのはもういやなの。私もブレイドと一緒に戦いたい!それに……………ノノノノ」

「それに?」

「なっ、何でもないよ。／＼!」

「…………、そオだな。教えてもイイ」

「本当!?!」

「あア。ただ、魔法ツてもただの力だ。力の使い方間違えたら、あの正義語った屑共にも成り下がる。ソレを忘れンじゃねエぞ。」

「はい!」

「……エ
って事でエヴァン&「エヴァって呼んで!」……エ
ヴァに魔法を教える事になった。」

「真祖の吸血鬼のスペックや、元々才能が有ったのか、エヴァはメキ
メキと実力を付けていった。」

ラカン強さ表では大体7000くらいはあるだろう。

更に最近「マキア・エレベア闇の魔法」を編み出して更に強くなっていった。

エヴァが披露した後に、即「ゼロZERO」で覚えて使ったらかなり落ち込んでたのは、よく記憶に残ってたなア。

ン？俺？分かるわけないだろうが。大体「フラグメント世界」の修正力としての力が数字で表現できたら苦労しねエ。魔法と欠片無しで絶壁走れるしなア。

エヴァがそれなりに自衛出来る様になったんで、旅の行き先を魔法世界のアリアドネーに移した。

彼奴ならエヴァも受け入れてくれンだろ。

ゲート？ンなモン使わねエよ。

それはな・ぜ・か！『王の財宝』の中にディーグレイマンの『方舟』

があつたんだよ！！

どうなつてんだ！？と思い、中に有るものをある程度調べたら、他作品の道具や武器がわんさか入っていたのは本当に驚いた。

エヴァのリアクションは、もう何かを諦めた様な顔をしていた。

俺もそだよ。

で、魔法世界に着いたら又もや災害地区に遭遇。

なんでもメガロメセンブリア……………連合のバカが襲つたらしい。亜人ばかりだったからな。

どオやらメガロメセンブリアの『人間』は亜人達を人扱いしてねエみてエだ。

この村の亜人達の角は、秘薬になるらしく、時折メガロメセンブリ
アのバカ共が襲ってきた理由だそオだ。

そのせいで農作物が襲われた時に奪われ、食糧難に陥っていた。

そこで皆の『ゴド・オブ・ザ・ライフメーカー造物主の掟』。

農作物や資源を片っ端から削ってやった。かなり適当だったが案外
簡単に出来るモンだな。

村人達は、俺達の事を『マキステル・マキ立派な魔法使い』つつた奴は全力で否定し
たから、『マキステル・マキ立派な魔法使い』とは呼ばれなくなった

誰が好き好んで老害に手柄渡す様な事するか。

その後、空気を読めない馬鹿共が襲来。

馬鹿共にはあの世への片道切符をプレゼントしてやった。

そして、改めてアリアドネーに向かい、出発した。

俺は、何時でも周囲を『糸』で包囲網を形成してる。バミューダアスポートで不可視にしたら完成だ。

近くに何かがあれば、糸が震動し気付くし、最悪転生者なら半径10キロ圏内に入ると俺自身が知覚出来る。

そして、遂に網にかかった転生者^{アホ}が現れた。

見た目は銀髪にイケメン。だが中身の劣悪さで、嫌悪感しか感じない。

「（エヴァ、少しの間警戒しろ）」

「（うん、わかった）」

万が一を考えて、何重にも魔法で結界を作る。

バミューダアSPORTをエヴァに使用。これでエヴァを奴は探知出来ない。

「なツ！？エヴァの姿が消えた！？」

「本当にアホだな。自ら姿を見せるなんざよオ」

突如として現れた俺に驚いて思わず後ずさっていた。

コイツ、典型的なワカメ体質か？

「お前は！エヴァと一緒にいたガキだな！！エヴァを何処に隠した！！！」

「ギヤアギヤアうつせエンだよ、何の用だ。人の睡眠妨げて迄の用なんたるオなア？」

すると、奴の態度が変わる。慢心と傲慢に溢れた表情だ。

「あ？俺のエヴァを隠しといて、誰に向かって言ってるかわかんねえか？最強オリ主だぜ」

何時エヴァがオマエのモンになったよ。アリア基準で視てたらダメそオだな。

魔力駄々漏れ、ろくに制御出来てねエな。

「世界に敵性を確認、排除する。オン・アバタ・ウラ・マサカト

(コレ俺の始動キー)」

まずアイツがどんな力を貰ったか確認して、対応するか。

「魔法の射手、連弾・光の1000000000矢」

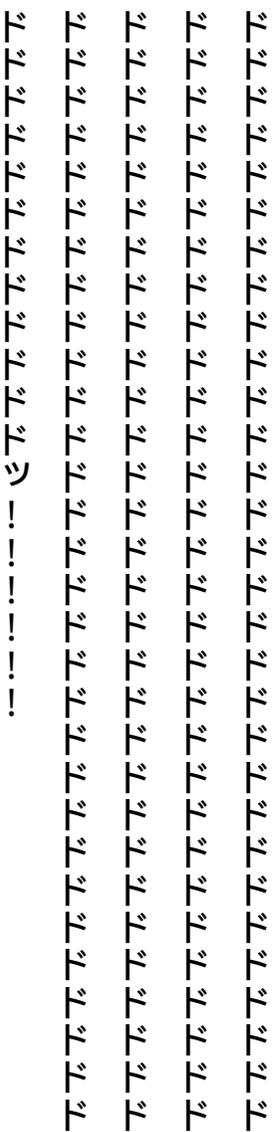
「ハアツ!!!？」

後のエヴァは、こう語る。

あれは
か？

旧約聖書の再現がしたかったんじゃない

後の、ソドムとゴモラ、である。(プロジェクトX風)



………神話に出てきてもおかしくない絨毯爆撃をしたんだが………ま
だ生きてンな。

「はッ……ハッ……ま、また死ぬかと思っただぜ……『一方通行』選らんで良かった……」

「自分から手の内晒してくれるとはな、転生者はスペックが高くとも、中身はただの素人だからしゃあねエか。」

いきなり目の前に現れた俺に、またしても後ずさる。

ワカメ体質確定だなア。

「ハハッ！ だつたらなんだ！ 俺にはどんな攻撃も効かねえ！！ 諦めて俺のエヴァを渡せ！」

「アイツは誰かの所有物じねエよ。……にしても一方通行かア……イイコトオ聞いたなア『カンダタストリング』」

「へっ？」

バミューダアスポートで不可視にした、無数の斬糸でドカスを拘束する。だいぶ深く切り込み過ぎたか。拘束した後にバミューダアスポートを解除。勿論意味はある。

「ギッ……ギャアアアアアア！！？ なっ、何だよコレ！？ ぜ、全然切れない……ベクトル操作が出来ない！！？」

当たり前だ。『神の糸』の数値を入力してる訳ねエだろうがよ。

「切れねエのは当たり前だ。それを切れんのは神だけだ。テメエ等
転生者風情がどうこう出来るモンじゃねエンだよ。 』
エターナル・ディストーション 』」

コイツは『サイコネシス』応用し、相手を吹き飛ばす技だ。 欠片^{フラグメント}
は反射出来ねエなら、倒すのは容易い。

「……………クソオ!!」

奴はベクトル操作で大気を収束。プラズマを発生させるが『風^{ウインド}』で
計算式を乱した

「つかオマエ、風系の魔法とか使われんの分かりきってんのによく
やるうとしたなア」

「グツ……………!! だったらぶん殴ってやるよ!!」

……………「ここいらで終わらせるかア。

奴のパンチを片手で止める事で体験、理解した。

「 『覚えた』 」

「は? 」

さア、判決の時間だ。

一時の別れ

side 三人称

「覚……えた……？」

その男にしては、信じられないだろう。天使と名乗る者から貰った力を覚えた等と、信じられる筈がない。

「ああ、そオだ。信じられねエか？」

「当たり前だ！！何だその力は！？」

「オマエ等みてエな、チカラア貰っただけのバカには丁度イイだろオ！！」

ガンッ！！と、右足を地面に叩きつけると、レンを放物線上に罫が入り、破片がまるで転生者 男を狙う様に向かう。

男は少し身動きながらも反射でこれを防ぐ。

その身動きが隙となり、

「『デインドライブ・F・H』」
フォックスマウンド

一瞬で男の後ろに回り込み、音速の数倍の速度で連撃を叩き込む。

「ガッ……何で……反……射が効かない……!?!」

「オマエの演算能力と俺の演算能力が勝負にならなかったんだろ」

「そ、そんなはずがあるか!! オリジナルの俺より、偽者のお前が勝る訳が「なア、ポジティブフィードバックって知ってるか?」ッ!?!」

「正帰還、核分裂なんかには代表されんよオに、ある反応が増幅促進される現象……。この意味、分かるか?」

「……?」

「……そして、俺の能力はただ覚えるだけのチカラじゃねエ」

「……ま、まさか………！」

「俺が覚えた力は、より高い次元に昇華されんだよ」

相手の力を増幅し、強くして覚える欠片。フラグメント

それがレンの『ボジティブファイゼンバックPF・ZERO』の能力。

そう、だからこそレンは『フラグメント欠片』を求めた。

転生者達あいてがどのような力を貰ってしようが、レンは常に相手より強い攻撃が出来る。

力任せの転生者を倒す事など、造作もない。

「オマエを見れば大体の力量は分かる。貰った力は『一方通行』と膨大な魔力、って所か」

「!!!」

「凶星みてエだな」

「うるせえ!!!」

男は、ただ力任せに突っ込んでいく。それ以外の努力などしていいのだから、方法はそれしかない。

冷静に考えたら、分かる筈なのに。

一方通行に力任せが通じないのは、その男が一番わかっていた筈なのに。

男の拳は、レンの体に触れた瞬間、反射され、右手首が折れる。

「ぐああああああ!!!!!!?」

「貰いモンのチカラなんかじゃねエ。努力を積み重ねて手に入れた力だったら、俺に勝てたるオナア」

「ぐあああ……クソ!クソクソクソ!!何でだ!!!!どうして……。俺は最強のはずなのに……ッ!!」

「オマエが力に慢心せず、それを高める努力をしたら……最強になれたかもなア」

男の足下から、熱を奪われている様に凍っていく。

「か、体が……凍っていく……!？」

熱エネルギー吸収能力
がないからだ。

などと、レンは言わなかった。必要

レンの掌に、吸収された莫大な熱エネルギーが収束されていき、

「い、嫌だ……死にたく」

男の目の前で、放たれた。

「悪いなア

」

「誰に敵に回したか、分かってんか？オマエ」

『第四波動』。

数日後、二人はアリアドネーの魔法学校にたどり着いた。

「此所がアリアドネーか……。エヴァ、入学手続きすんぞ。」

「うん。でも、私ここに入学する意味あるのかな？」

「ああ。ここの卒業生になる事が重要なんだよ。そうすれば、最低アリアドネーとヘラス帝国から危険視されることはなくなる。吸血鬼の真祖だろうがな。メガロメセンブリアの魔法至上主義バカは兎も角だがなあ。」

メガロメセンブリア
彼処は、あれは最早狂ってると言ってもイイだろ。とレンは付け足した。

アリアドネーは学ぼうという意味さえあれば、犯罪者でも受け入れてくれる。

自分がいなくなっても、抑止力になってくれると信じて。

理解者になってくれると信じて。

「ブレイド。お願い事が有るんだけど、聞いてくれる？」

「何だ？厨二病発病権は絶対に駄目だぞ。」

「バックティオー仮契約して」

「……いきなり何だ？」

「ブレイド、行っちゃうんでしょ」

「……」

「だから自分がいなくても、私に味方になってくれるから、アリアドトネー此処に
来たんでしょ？」

「……ああ、そうだ」

「この時代にもう転生者はいない。」

レンは最初の転生者の襲撃に、近距離に複数の転生者も確認した。

エヴァが寝ている間に、結界を張り、潰しに行っておいたのだ。

エヴァにも、絶対ではないが、ある程度の安全も確保できた。

故に、この時代に留まっている理由はなくなった。

「よく……分かったな」

「何年一緒にいると思ってるの？わかるよ」

「……そオだったな」

「だから、ブレイドとの繋がりが欲しいの」

「……………なんかエロいな」

「真面目な話してるんだよ／＼／＼！！？……………まったくブレイド
つてば、変な所で……………「レンだ」……………へ？」

「レン・スプリングフィールド。これが俺の本当の名前だ」

「……………！ 言っちゃってよかったの？」

「嫌が応でも仮契約すんだろ？ だったら隠してる意味はねエ」

「…フフフツ、よく分かったね」

「何年一緒にいると思ってんだよ」

「そうだったね」

二人とも笑い、そして理解者として認め合えた。

魔法陣を書き、準備を始める。

「エヴァの血つてすぐ蒸発するけどよオ。仮契約には問題なさそうだなア。ツと、出来た」

「……………（ジト目）」

レンはナイフを取り出し、宝石に血を垂らす

「ほれ、ナイフだんむツ／＼／＼!?」

次の瞬間、エヴァはレンの唇を奪っていた。

「んむ……………ぷはッ!ん、じちそつちま」

「何がごちそつさまだテメエ!!!?……………一応、初めてだったんだぞ／＼／＼」

「グハアッ！！／＼／＼」

「エヴァー！？」

エヴァの、出血による失神

は置いていて。

レンの前に、光に包まれた扉が出現する。

「教えて言おう……倒れて悔い無しと……！」

「オマエ誰に向かって言ってるんだ？……ったく、じゃあ行くぜ。」

「うん。また……会えるよね？」

扉は開かれ、光がレンを包んでいく。

エヴァの眼は、不安ながらも仮契約カードを握りしめ、確かに道を観た眼だった。

「立ち止まるな、歩き続けろ」

そう言い残し、霧の様に輪郭がぶれ、そして何時しかレンは消えていた。

エヴァは、音では聞こえない言葉をカードを通し、確かに聞こえていた。

ンなモン、当たり前だろが

。

一時の別れ（後書き）

ヒロインアンケート募集しています。

現在、真名一票

刹那一票

千雨一票

アキラ一票

刀子、シャークティ、しずな先生陣。

確定者 アスナ 木乃香 エヴァ。

大分裂戦争へ（前書き）

ちよい無理矢理感が出てますが、勘弁してください。

大分裂戦争へ

side三人称

「何でまたここにいんだよ。」

光を抜けた先は、レンにとっての始まりの場所だった。

「御勤め御苦労様、と言いたいが。仕事だ」

瞬間移動の様に管理者は現れた。

「早エよ、別に構わねエけどよオ。ソレが俺の存在理由みてエなモンだからなア。」

「働きの者の部下がいて助かる。まあ、残業手当てなら用意している。右手を見ってみろ」

「…コイツは……令呪……！」

レンの右手に刻まれていたものは、確かに令呪だった。

「これでサーヴァントを喚べ。今後は特に戦地だ、一人は辛かろう。精神的に」

「サンキユ。……で？本題は？令呪を渡したいが為に態々呼んだ訳じゃあねエだろ」

「ああ、実は君の魂が神格化してきたのだ」

「……………はア？」

ザ・ワールドッ……時よ止まるッ！

「いや、元々素養が有ったのだよ。私が抑止力にしたのがだめ押しだった様だ」

「イヤイヤイヤ！！抑止力が神格化つてどオいう事だア！！あり得ねエだる理屈的に！！！」

「ハツハツハツ」

「ハツハツハア！？華麗エにスルーしてンじゃねエ！！あまりの展開に誰もついてけねエよ！！！」

「嘘だ」

「エデンスシード解放オオ！！！」

レンの右腕に『スライグマータ聖痕』が浮かび上がるッ。

「『第五波d「君がとある神の性質を帯びてしまったのだよ」……………なんだと?。」

「つまり、転生者ブチ殺してる抑止力としての俺じゃなく、レン＝スプリングフィールドとしての魂が神格化しただと？何でそんな面倒クセエ事になってんだ。神つてのは信仰されねエと生まれねエンだろ？」

「君は中々の善行をしただろう？君に助けられた者は『神の再来』と崇められて……そんな嫌そうな顔をするな」

「すんに決まってるだろうが」

レンにしてみれば、頼んでもいないのに人が勝手に崇め、そのせいで自身が変革してしまったのだ。

自業自得と言えばそれ迄だが、レンにとっては迷惑千万である。

「あんなモン只の自己満足だ。」

「君にとっては自己満足でも、助けられた者はそう思っていない。ただそれだけだ」

「……………チツ、クソツタレが。で、なんか変わんか？行動が制限されるとかよオ」

「君は欠片フラグメントを持つと同時に、神格者としての力も持てる。喜びたまえ、パワーアップだ」

「これ以上強くなる必要あんのかよ……………。で、どんなチカラなんだよ」

「君が神格者として名乗る名によってそれは決まる。ま、基本は封印状態で落ち着くが」

名前ねエ……………、と、レンは暫く考えた。

「……………決まったぜ」

「ならば聞こっ」

「がおうきしたけはやすさのつのみこと我王紀士猛速凄乃男命、てのはどオだ？」

レンが名前を言った瞬間、レンの中に何かが生まれた。

「あらゆる魔の根源……か。やはり君は発想力が凄いようだ。いや、妄想力が「叩き潰すぞ」……フツ、冗談だ」

もし直ぐ様訂正してなければ、管理者が一人不在になる所であった。いやマジで。

「次の時間軸は……って大分裂戦争時に決まってるだろうなア。
絶対」

「ああ、ここが一番の踏ん張り所だ。頑張ってくれ」

「ハア……。面倒だ」

「しかし……………、何故凄王にしたんだ？態々、究極の魔など」

「…………人間ってのは、話したら皆が判り合える、なんて事は絶対に有り得ねえ。これは真理だ。」

レンは、人の醜さを前回の仕事場で良く理解していた。

解り合える者もいるが、世界にはそういう醜い人間もいる。

「人を動かすのは恐怖だ。そして、人にその愚かさを気付かせるのも恐怖だ」

優しさで理解してくれる者には救いを。

理解出来ぬ程の愚^{クマ}か者には絶望をくれてやる。

それが、今のレンの精一杯の答えだった。

「思いついてるのは、解ってるがよ……………」

「…………君は、人間に絶望したのか…………？」

しかし、レンは振り返らない。ただただ、その小さな背中を向けた
ままだ。

「ハッ、ンな訳やねエだろうが」

しかしレンは、笑っていた。

「その希望を魅せてくれた奴を俺は少なくとも一人、知ってるぜ」

「…フッ、ソウが」

エヴァとの仮契約カードを見せ、そう言い残すと、レンは光の扉をくぐり抜け、新たな仕事場せんじょうに向かった。

扉をくぐると、そこは戦場だった。

「幾らなんでもいきなり過ぎんだろ。」

こんな両軍がぶつかり合ってるド真ん中にぶち込まれれば、人間そつなるだろつ。

兵士達は「何だコイツは?」「どうせ帝国だろ」といいつつ、レンに襲っいかかってきた。

「..... a y u f s c y d k 死 L g p u e a
」

戦場に現れた一人の少年が、そう呟いた瞬間、

世界全ての生物を一瞬で殺し尽くせる程の死ノ恐怖が、世界に溢れ出した。

82

s i d e ナギ

前線で敵を蹴散らしているとアルが声を掛けてきた

「本陣から左翼へ行けという指令が来ましたよ。ナギ」

「何だよ？」

「どうやら帝国からの援軍が来たようです」

「わかった。わざわざ俺を遣わすということとはよっぽど強いんだろ
うな。ワクワクしてきたぜ！」

「はあ、お前って奴は」

近くで話を聞いていた詠春が、何か言ってるが関係ねえ

そう考えた時。

ズドン！！！！！！

と、体が悲鳴を挙げた。本能が、此処から逃げると叫ぶ。

どうやら戦場にいる人間全てが同じ様だ。

「何、だ…これは…ッ!!!!?」

詠春が呟いたら、空から千の雷とは比べものにならない巨大な雷、
が前線に落ちやがった。

ゴアアアアア!!!!と、余波が此処まで届いた。

「くっ……!!、オイ!!行くぞお前等!!」

急いで雷が落ちた所に向かう。

其処にいたのは、

そこに在るだけで、死の恐怖を撒き散らす魔の神がいた。

大分裂戦争へ（後書き）

ヒロインアンケート途中経過です

真名二票

楓一票

千雨三票

アキラ四票

夕映一票

先生陣四票

確定者 アスナ 木乃香 刹那 エヴァ以上です。

後、アチャ子の資料を探しています。これは知ってる人がいたら、教えてください。

死の恐怖

sideレン

力を解放したら、兵士達が地面に膝をつき、震え、動かない。

まあ当然だろ。

凄王の特性は異能。ありとあらゆる異能の源。そして究極の魔、真の武、死と破壊の神。其処に在るだけで死ノ恐怖を撒き散らし、死ぬ可能性が有る生物は死ノ恐怖から逃れられない。

力の制御出来なかったからダチできなさそオだな。どオでもイイが。

てか髪長ツ！殆どナマハゲみてエじゃねエか！！

まア、おかげであんま顔分かんねエからイイがよオ。

後で切るか。

トンツと足で地面を叩く。

それだけで通常の数億倍の大きさの雷が落ちる。

それで、前線に出てきた連合と帝国の兵士は、轟音と共に一掃された。

ああ？無理矢理徴兵されたっばい奴ア殺してねエよ。

「さてさてエ、こんだけ派手にやらかしたら」…走れよ稲妻、千の雷！！！」……………ほオラ来たア」

さアて、力試しといこうか？新旧世界最強オ。

ナギ達がとつた行動は極めてシンプルだった。

ナギは千の雷、ゼクトは燃える天空、詠春は真・雷光剣、ラカンは核兵器並の威力のある気弾、それを直撃させる為、アルの上空からの重力魔法。

それぞれが、乙のが持てる力の全てをこの不意討ちに賭けたのだ。

それは外したら負けと直感したからこそその行動だった。

しかし。

バチン！！

その全てを、少年は片手を無造作に振っただけで弾き、かき消された。

しかも、重力魔法と千の雷は弾かれた瞬間消失。燃える天空に到っては吸収された。

「「「「「!?!?」「」「」」

その弾いた腕すら傷一つ付いていなかった。
紅き翼の面々は、全力で距離をとった。

少年は片手を挙げ、

「カカツ」

瞬間、空が八匹の龍に埋め尽くされた。

side 詠春

これは一体何だ!?

自分たちの全身全霊を込めた一撃を簡単にかき消し、上空全てを覆い尽くす程の龍を喚ぶ。

こんなもの、神話にしか聞いた事がない。

「何だ……これ……!？」

ナギが呟きアルビレオも口を開く。

「あの八匹の竜は一体……龍ではない!知っているのですか!?ゼクト!!」

「あれは上空に集まった莫大な気、魔力じゃ。その世界を包む程のあまりのエネルギーが行き場を求め、龍の形に見えるだけじゃ。しかも竜でわなく龍。こんな事が出来るの……神だけじゃ」

神話に出てくる………竜でわなく、龍。 ツ!……!!

「太古の昔、旧世界にこの世にたった一人だけ神が存在した、という記録がある」

「神だと……?」

「ああそうだらカン。魔法を含め、ありとあらゆる魔の根源とされた存在だ。そして、その神は三つの事象を司る神だったといわれる」

「三つの事象…それは?」

「武と破壊と………死の神だ」

そう、人間がどうこうできる存在じゃない……！！

その時、気付いた。

さっき迄そこにいた奴がない。

ちゃんと警戒していたはずだ！？

そう思った瞬間、

ザワツツ……！！と、身体中が危険信号を拳がり、後ろから声か聞こえる。

へエ、わざわざ説明ご苦労様ア。

そこで私の意識は途絶えた。

side out

何をされたか分からなかった。各々が最強クラスの名に恥じぬ強さを持っていた紅き翼が。

サムライマスターと呼ばれる青山詠春は瞬殺。

この事が、当時十数歳のナギを突き動かした。

「て、テメエ！……！」

「待つんじゃ！……ナギッ！」

不老で、メンバーの中で多い知識と経験を持つゼクトは、目の前にいる『モノ』が何なのか。その危険性を正しく理解していた。

「オオオオ……！」

ナギは『ナニカ』に殴りかかるが、

トッッ、

突っ込んだ筈のナギの胸に、『ナニカ』は手を置き、呟いた。

「……………html第四ncgr波動petm」

カツ！

『燃える天空』と比べられない、極大な熱線がナギを包み、吹き飛ばした。

「ナギ！！チクショウツ！」

ラカンは、自身の最も巨大な武器、斬艦剣で斬りかかる。

だが、『ナニカ』に近づいた途端、斬艦剣はバターそれの様に削り取られた。

「！！！！！！」

知っている。

これは、『完全魔法無力化能力』だ。

「……………カ p n t x e」

ラカンが理解したと同時に、ラカンは殴り飛ばされた。

カッ消されたと表記した方が正しいと思えるほどの威力だった。

空中に立った『ソレ』は右手から緑色の槍の様な炎を作り出した。

「雷霆rkmpw槍」

問題はソレに込められた魔力の量だった。

あり得ない。

この世に現存しているどのような存在を愕然、呆然させる程の魔力で作られた槍が、投撃される。

ゼクトの『クラティスター・アイギス最強防護』は、紙切れの様に破られ、その戦場を消し飛ばした。

勝敗、などという話ではなかった。

s i d e レン

一応、親父殿には勝利したんだが……。あれは勝負になつてたか？

残りは、龍眼で観て、屑以外は生かした。連合の正義バカは論外だな。

『龍眼』は、物体、事象、存在。これ等全てを『観る』事が出来る。人の死や、未来さえも。まア精神力がないと発狂するが。

次はどうすっかなア……。そオだなア、アスナに会いに行くか。

龍眼で世界を観て、移動する。

その戦いは帝国の勝利に終わった

いや、正確には帝国側が生き残りった。が正しい。連合側は、ほぼ全滅。紅き翼は文字どおり蹴散らされた。

生き残った帝国軍はこの事を、体を震えてさせながら報告し、帝国の皇帝は戦慄した。

両軍ほぼ全滅。

全兵が全員死傷した訳ではない。その圧倒的な死の恐怖で戦意が、

戦場ごと殺し尽くされていた。

それを行ったのが、見た目5、6歳の少年だったという事も理由の一つだが、

500年前に、「神の再来^{ザ・セカンド}」と呼ばれた人物とその少年の特徴が合致しており、更に少年が放った死ノ恐怖が王宮、そして全世界迄届いていた事で皇帝を震え上がらせたのだ。

戦争を起こし、大勢の被害者を出した事による、神の罰か。はたまた世界の終わりの前兆か。真実を知る者は、その存在しか知らない。

その日から、世界はその少年の事を畏怖を込めて『禁忌^{インセイン}』と呼んだ。

死の恐怖（後書き）

アンケート途中経過ッ！！

千雨 九票

アキラ七票

真名六票

茶々丸二票

夕映二票

さよ二票

裕奈二票

楓一票

のどか一票

まき絵二票

先生陣四票

スゲエ、千雨さん一番人気ですね。

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァです。

アンケートや感想、こうしたら面白くね?という意見もどしどし募
集してます。

黄昏の姫御子（前書き）

ちよ~~~~~短め。

黄昏の姫御子

黄昏の姫御子

s i d e レ ン

今日、俺はオスティア最深部に来ている。

何でんな所いるかというと。

「ダレ？」

アスナのここに来てる。

にしてもマジ無表情だなアオイ。しかも鎖に縛られて、口元には血とは。

やった奴蒸発させるかア、物理的に。

「オマエ、名前は？」

アスナの血を拭き問う。

「アスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。アナタは？」

「俺はレンだ」

よし、まずは感情を取り戻すか。……………アスナが「レン……………」って呟いてる。これは大きな一歩なんじゃねエのか？

「レンはナニしにキタの？」

「人形みてエな奴をバカみてエに笑いさせに来ただけだ」

そう言うと不思議そうにしていた。

「みんなはワタシの力をコワがつてちかづこうとしないのに」

「……………魔法無力化か、ハッ」

俺はサギタ・マギカを一発誘導させて自分にぶつけ、消す。

「……………ああ、俺もだ」

sideアスナ

目の前の少年の行動が解らない。

現れたらワタシを人扱いし、縛っていた鎖を壊してくれた。

何故？

他の人の様に、道具扱いや、怖がりもしない。

「みんなはワタシの力をコワがってちかづこうとしないのに」

すると彼が笑い、魔法の射手を自分にぶつけ……………消え……………た？

すると、彼は苦笑しながら信じられない言葉を言った。

「……あア、俺もだ」

……え？ワタシと同じ……？

彼がワタシの頭を優しく撫でてくれる。

……暖かい。

解らない、分からない、判らない、ワカラナイ。

それでもワタシは嬉しくなった。何でだろ

ワタシは無意識にうなずいていた。

そうしたらレンは微笑みながら、ワタシの頭を撫でてくれた。

なんだか、胸がすごくぽかぽかしてきた。

ワタシが昔、なくしたものが戻ってくる気がする。

なんでだろ？

すると、誰かの足音が聴こえてきた。

「時間か……………」

「行のちやうの？」

「まア、そオなんだがよ……………オマエはどうすんだよ？」

ワタシ？…………ワタシは…………ワタシも一緒に…………！

…………でも、ワタシみたいのが一緒だったら…………彼も嫌がるに決まってる…………。

「…ハア、なんかデジャブってんな……………」

そう言つと、彼はワタシの手を取って立ち上がらせてくれて、

「……………なにやってんだ、行くぜ」

「え………?」

「言っただろっが」

「……………笑わせに来たってよ」

ワタシを外に、連れ出してくれた。

黄昏の姫御子（後書き）

アンケート途中経過ッ！！！！

千雨 九票

真名八票

アキラ七票

楓三票

茶々丸二票

夕映二票

さよ二票

裕奈二票

のどか一票

まき絵二票

先生陣四票

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァです。

アンケートや感想、こうしたら面白くな？という意見もどしどし募
集しています。

女性のカン是世界一。(前書き)

ノクト(アチャ子はちゃんと出しますよ。いや、正確には出ています。これヒントッ！

レン(ヒントになってねエだろオがよ。ハッキリに言えよ、アリ』
アウトオオオ！……！』

女性のカン是世界一。

sideレン

今、俺はアスナと一緒に方舟の中にいる。

理由は単純、サーヴァントを安全に召喚する為だ。

『アイツ』から折角の残業手当てを貰ったんだ、使わねえと頑張った甲斐がねえ。

一応セイバーかキャスターの、トップクラスの英霊のはずだ。

英霊は誰かを指定するつもりはねえ。まあ、アヴェンジャーか某ジャンヌ信者のクソ野郎以外なら基本構わねえ。

後は野となれ山となれだ。

因みに、アスナは寝ている。三徹してなかったんじゃないか？と思っ程熟睡してる。

「……………鎖せ鎖せ鎖せ……、英霊の座に在る、まだ見ぬ俺の使い魔！間違った望みを抱いてよオが、取り返しの利かない罪を犯してよオが構わねエ！！その力の全てを俺に託してくれんなら、テメエに俺の命運を託してやる！」

「……………来やがれ！！我が天秤の守り手よ！！！」

召喚の正しい詠唱なぞ知らねエから、省いた。

さて、どんな奴が召喚出来たかねエ。

俺の目の前には……………、

「は？」

……………青いドレスに騎士甲冑を身につけ、綺麗

な金髪を持った少女。

青セイバーもとい、スタボロ虫の息状態の……、

……アルトリア・ペンドラゴンがいた……。

待て、落ち着け俺エ…。

サーヴァントを召喚出来たのはいい。まだ理解できる。

何故に血塗れエー!!？

勿論そんな状態で放置するのはアレだったから、フラグメントの『治癒』と『変身』、『一方通行』、更には『龍掌』を同時発動させ、治療している。

シュトローム風に云うならば、『閃華烈光拳』ってトコかア。

しているつつても、既に傷の修復は完了しており、俺のベッド（方舟の中の）に寝かせて、後は意識を回復すのを待ってる所だ。

ま、治療系の異能を総動員したんだ。それで『助かりませんでした。』じゃ済まさねエぞ。

「ん……………レン？」

「アスナか。悪い、起こしちまったか。」

隣のベッドで熟睡していたアスナが目覚める。

本当は部屋も別にしたかったんだが、全力で拒否られるとは思わなかった。

「その人は？」

「俺のサーヴァント、……の筈なんだがなア」

「サーヴァント？」

「特別な従者兼使い魔みてエなモンだ。」

「そう……」

長門有希みてエな反応だなオイ。

にしても、……まさかアーサー王が出てくるとはなア。

『……間違った望みを抱いてよオが、取り返しの利かない罪を犯してよオが構わねエ!!!』

……絶対アレが原因だなア。

しかし、彼女は協力してくれんのかねエ？ここには願望機は無い。有ったとしても、あんなフザけた願いを叶えさせる気もサラサラ無エ。

……さアて、どオすツかなア。

「……う……ん、私は……」

どオやら、王サマはお目覚めの様だ。

「よオ、目エ覚めか」

「……は……？」

少々虚ろだが、意識的はあるな。

体は『一方通行』で触れていれば検査はできる。無論、問題なんてねエ。

「あー、『魔法世界』と呼ばれる火星に位置する異世界だ。ちなみにここは俺のアジト。ぶっちゃけ並行世界だ」

「わたしは……死にかけていた……いや、死んだはず」

ホントな、お陰でとんだバカ面晒しちまった。

俺にとっては虫の息でも、他の医者なら投げ出してただろオからなア。

死んだら死んだで『反魂』で生き返らせるが。

反魂は死体が腐敗してよオが、大体一ヶ月以内なら蘇生可能だがなア。

無闇やたらと使いたくねエがなア。

「貴方は？」

「レンだ。オマエを召喚したマスターの筈だが？」

右手の令呪をみせる。

「そうですね……。しかし、私の記憶は所々が混乱しています。おそらく……」

「チカラ技召喚だったから、不具合が生じちゃったかもな。パスもスタスタだろ」

「ええ、不確定なパスで魔力が途切れ送られてません」

うっわ、マジ衛宮くん状態。

ま、魔力パスぐれエ、仮契約でどうとでもなンだろ。

誤解が生まれそうだから訂正入れとくが、血による仮契約だ。

キスなンぎ、やらかしちまったらエクスカリバーで真っ二つにされちまうわ。

見た目14歳でも、精神年齢100越えてンだぞ。

エヴァ思い出すわ。

つか、仕事始めてから肉体と実年齢が合ってる仲間がいねエ……………

エヴァ、アスナ、アルトリア、俺。

年齢不詳にも程がある。

「ムッ、何か失礼な事を言われた気が……………」

その直感Aは、絶対ギャグ補正はいつてるよな！

「激しく同意。」

ブルータス（アスナ）！！オマエもかアアアアッ！！！！

「……………ハッ、何かレンに馬鹿にされた気が!？」

^{エウア}真祖のスペックは廃が付く。

女性のカン是世界一。(後書き)

千雨 十票

真名九票

アキラ八票

楓四票

茶々丸二票

夕映二票

さよ二票

裕奈二票

のどか二票

まき絵二票

先生陣五票

(。。。)千雨パネエ……。

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァ。

アリア、アルトリアも入れるか迷ってます。

アンケート待ってます!!

対面（前書き）

アルトリアのヒロイン化が決定しました!!!

対面

side 三人称

「丁度あんの親父^{アホ}は、母さんと会ってる頃だろ」

アルトリアを召喚して数ヶ月経った。

アルトリアの仮契約は後回しにし、まず受肉させてからにする事に決めた。

受肉方法は、もう色々有って忘れていたがレンの体は「アダム」なのだ。つまりは神の現人^{うつせみ}であり、キリスト以上の「救世主^{メシア}」なのである。

つまり、レンは「摂理代行者」としての価値と、神の肉体としての価値があり。おそらくその肉体の価値は、「使徒^{アポストロフ}」に同等以上。

その肉体の一部を媒体として使えば、英霊一人の受肉など容易い。
結果、

……ぶっちゃ俺の血イ飲ましたらいけんだろ。

という方法を撰ることにした。

キャストークラスの魔術師が居れば、こんな適当案を出さなかった
が、生憎レンに魔術知識は無い。

仮にメディアがレンの存在を知ったら、卒倒間違い無しだ。

「レン」

レンの側にいるアスナが常にいる。そのレンに付いてくる姿は、仲
のいい兄と妹に見える。

服装は、長年着ていた儀式服ではなく、普通の女の子のそれにして
いる。

そんなアスナを、体感時間で50年ほど会っていないエリアに重ねてしまうのは、しょうがないのではないのか。

レン達は、紛争地域や戦争で傷付いた人々を治したり。また、連合による理不尽な襲撃に会いそうな村々を回っている。

レンは、まるで何時ものようにと言わんばかりの手付きで、怪我人達を片っ端から治していた。

レンの治療法は二つに分かれている。

体の一部が欠けていない傷に対しては『龍掌』を使う。

龍掌は、対象者の気、魔力を使い自己治療能力を限界まで強化し、治す。

端から見たら、ただ殴っただけで傷が消えている様に見えるだろう。

体に欠損がある場合は、『変身』か『治癒』の欠片を使い再生させ

る。

龍掌と違い、レン自身に負担はあるが、全人類を一から造り出したとしてもレンにとって『負担』にはならない。

しかも、それは人間に対してのみで、魔法世界人は『リライト』で事足りる。

下らない正義を掲げ、自分の行為は正しいと思い込んでいる愚者に対しては、圧倒的な力で尻ぎ払う（余りの馬鹿さ加減にキレ、半凄王化）。

そんなの姿に、アルトリアは思わず見惚れ、時が経つにつれ興味を持った。

何故この人は、これほどの力を持ちながら、自分の欲の為ではなく、人々の為に振るえるのか？

アルトリアが聞いてみたら、

「……ただの自己満足だ。意味なんてね」

(フフツ、不器用な人ですね)

アルトリアはまだ、レンに惹かれ始めている事に気付いていなかった。

「そおだ、アスナ、アルトリア。遊びにでも行くか？」

「うん」

『はい、構いませんよ』

だからアルトリアは迷ってしまっ。

自分はこんな幸せな日々を送っていて、良いのだろうか……。

「これ何？」

「アイスクリームauffundだよ。食べるか？」

「うん」

「……平和、ですね」

「だな。仮初めの平和でもイイモンだな」

レンとアスナは、行き掛けに紛争地域と災害地域を鎮圧し、復興させてメガロメセンブリアの下町に着いた。

実体化したアルトリアもいる。

アルトリアの服は、第四次聖杯戦争で着ていた黒スーツだ。

まだ魔力パスは完全に繋がっていないため、最強クラスとは1・2回しか戦えないだろうが。

『最後の鍵』グレートグラマホターキーで転移すれば、もっと早く着いたが、態々そんな回り道をしたのは、アルトリアとアスナに魔法世界の現状を見て欲しかったからだ。

「……………」

「記憶、戻りそオカ？」

「…はい」

どうやら、この数ヶ月で、何か記憶を取り戻しつつあるようだ。

(少し沈んでんな。まアシアねエだろ、あんな人生じゃア)

アーサー王は、最も有名な悲劇の王だ。

他国に滅ぼされたのではなく、自国に滅ぼされた。

14歳の少女が国の為に身を捧げたというのに、捧げた国に敵対され、最後には自分の息子に殺された。

その記憶を取り戻すのは苦痛だろう。

最高の騎士と呼ばれた、あのサー・ランスロットがバーサーカーになるのだ。

相当なものだろう。

だから、アルトリアは聖杯に願ったのだ。

やり直しを。

「果たしてその願い先に、オマエの幸せは在んのかねエ」

『?』

「戯れ言だよ」

無理矢理の話題転換により、話を終わらす。

ソフトクリームを食べ終わり、いくつか服を買って、また街を歩いている。

まだ昼過ぎで賑わっているが、そろそろレンは帰ろうとしたら。

「……!っど。」

「うおっ、悪イ!」

大量に荷物を抱えた人にぶつかる。

(つか、相手側の顔が見えねエンだが。フード被ってるのもあるが、持ってる荷物が矢鱈多いなオイ)

反射をデフォで設定している為、向こうは結構痛いはずだが、平気のようだ。

実際余り大した力でもなかったのもある。

「馬鹿者！人とぶつかる奴があるか！！」

「ハア！？誰の荷物のせいだとおもプツ！？」

男の連れが、レンがかつて見た事が無い綺麗なビンタを決めた。

その影響で、二人のフードが脱げる。

「……………何イチャついてんだ、ツンデレ女王にあんちょ」

「！？」

「……………何者じゃ。そしてツンデレとは何じゃ」

「そしてイチャついてねえ！」

二人……………、ナギスプリングフィールドと、

ア
リ
カ
・
ア
ナ
ル
キ
ア
・
エ
ン
テ
オ
フ
ユ
シ
ア
は
身
構
え
、
警
戒
す
る
。

対面（後書き）

アンケート途中結果ッ。

千雨 十二票

真名十一票

アキラ九票

楓五票

茶々丸五票

さよ五票

夕映二票

裕奈二票

のどか二票

まき絵二票

先生陣六票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリアです。

アリアはまだ思案中なので、アンケート待ってます。

ちなみにヒロインアンケートは、主人公が現代に帰る迄とします。

接触

side 三人称

一触即発。

レンの前にアルトリアが立ち、服は変わっていないが間違いなく不可視の剣をナギに向けている。

ナギもアリカを守る様に前に立つ。

「……………」

「……………セイバー、切っ先下げろ。」

「……………判りました」

アルトリアが切っ先を下げても、状況が変わるわけでもなし。

緊迫した空気の中、レンが話を切り出そうとした時、

「ナギ」

「姫子ちゃん?!」

「アスナ!?!」

そこに爆弾^{アスナ}が投入された。

アスナは片手にアイスクリームを持ち、食べている。

「オラ、物食ってる時は喋ったらダメッつってんだろっが。行儀悪い」

「ゴメン」

「……………数カ月前、アスナが誘拐されたと聞いたが……………まさか、お主が?」

アリカがレンを睨む。

睨まれるのは当たり前だが、レンとしてみれば、母親にそんな視線を向けられて、いい気分ではないだろう。

しかし、そんな視線を遮る様に、アスナが立つ。

「姫子ちゃん……?」

「違う」

「!?!?」

アリカは、アスナから聞いたことがないぐらい力が籠った声に驚愕する。

「レ……ブレイドが無理矢理私を連れて行ったんじゃない。私がブレイドに付いていったの」

「だからブレイドにそんな眼を向けないで。」

「……ッ！！」

アリカが顔を悲痛に歪める。

おそらく罪悪感からだろう。

『（……滅茶苦茶饒舌に喋ってんなア）』

『（無論です。数ヶ月とはいえ、私が教育したのですから。元々、飲み込みが早かったですし）』

『（流石騎士王さま。帝王学とか無敵じゃねエの？）』

念話でそんな会話をしていると、ナギがレンを見て気付く。

「お前……まさか、『インゼイン禁忌』か!?!?」

「何じゃと!!?!?」

その二つ名を聞き、レンが頭を抱える。

「……なんだその厨二感溢れる二つ名ッぱいのは? まあ多分俺なんだろオが」

「厨二?」

「オマエにやまだ早エよ、アスナ」

「わかった」

ナギは今だに警戒しているのか、分かりやすいくらいに魔力を昂らせている。

「……………ナギ、勝てるか?」

「無理だ。皆が居た奇襲でも手も足も出なかったからな。」

警戒するのも当然だろう。敵意が無いからか、次元が違いすぎるのか。アリカにはナギの感じている絶大な圧力を感じない。

「…へエ、力ばかりのアホだとばかり思ってたんだが。存外、まともな神経もあるんだな。見直したよ。」

一対億でも愚の骨頂。

一対一など正気を疑う。

全新旧人類が相手をして、レンにとって物の数ではない。

更にそこに世界最強の剣が加わるのだ。

万に一つも勝機は、生存率は無い。

「……黄昏の姫御子を返して貰えぬか」

「フザケンな。連れ戻してどうする？また兵器扱いして鎖に繋げんのか？」

レンの言葉に微量な怒気が含まれる。

アリカでなく、元老院が言った言葉なら最低の死は確定だ。

「……ならば、諦めるしかない。紅き翼でも勝てるのであれば、今戦っても意味は無い。それより、『完全なる世界』を倒す為に、戦争を止める為に手を貸してはくれぬか？」

「オイ、姫さん！」

「黙っている。……主の力量は大体分かる。あの大規模戦闘を一人で止めたほどじゃ。その力、この戦争を止める為に貸してくれ」

おそらくレンは『コスモエンテレケイア完全なる世界』の事も知っていると、アリカは判断した。

「…………ハツ、戦争、を止める為ねエ。」

レンは一瞬、呆れたような顔をして、鼻で笑う。

「何が可笑しいのじゃ」

「笑いたくもなるわ。戦争を長引かせた奴が、戦争を止めたいと努力する奴と一緒にいるとはな。」

「……………何じゃと？」

「アンタさア、『紅コイッリき翼』のせいで戦争が長引いたって事を分かってねエのかよ」

「なんだと!？」

レンの言葉に、流石にナギも聞き逃せなかった。

当たり前だろう、自分達が遣ったことが全否定されたのだから。

「そオだろオが。オマエ等紅き翼がいなけりや帝国は勝ち、戦争は終わってた、違つか？」

「なっ！？そんな事をすれば、連合は滅びていたじゃねエか！」

「イイじゃねエか。オスティアを除き、元々魔法世界は亜人たちのものだった。そこに土足で上がり込んできたのは旧世界人だ。」

「それを、我が物顔で亜人達から資源を搾取する馬鹿がどうなるオメガロメセンフリアが知ったこっちゃねエ。本気で戦争を止めたかったんなら、元老院と帝国上層部のクズ共黙らせて、和平案でもさっさと出すこつたな」

「なっ！？」

ナギが驚愕し、アリカが苦虫を噛んだ顔になる。

ナギに反論など出来ない。

そして何より、レンが言っている事は、全て事実なのだから。

元々力試し程度の理由で参戦したのだ。そんな事を考えてる訳がない。

所詮まだ子供だ。

「戦争するのは悲劇しか生まねえ。それはオマエでも何も変わらねえ」

「ナギ・スプリングフィールド。オマエは知ってるのか？」

自分の父親だからこそ、その軽率さが赦せない。

「力試しとか、テメエがふざけた理由で参戦し、戦争を長期化して、それが原因でどれだけの戦災孤児がいるのか」

「なっ……」

「知るこつたな。自分の作った悲劇の数を」

呆然とするナギを尻目に、レンはアリカに視線を向ける。

「アリカ王女、『完全なる世界』を潰すのはいいが、別の側面からも調べた方がいい。」

「…別の方面…？どついう意味じゃ？」

「奴らがどつやって世界を終わらせるのかじゃアなく、何で世界を終わらせようとしてんのかを……」

……ドオン！……！！

言い終える前に、どこかから魔法による攻撃が放たれた。

爆炎と爆風が一带を包む。

しかし、中から出てきたのは、アリカ王女とアスナを護ったレンだった。

レンは、自身の魔法無力化の能力効果範囲を障壁の様に拡げる事で、二人を守った。

それ以前にアルトリアが魔法を斬ったおかげで、その威力は極小になつた。

ナギは範囲外だったが、自分の障壁で防いだのだろう。

「人が話してる最中にチャチャ入れて来るたア……………潰されてエのか？」

レンの眼が、絶大な殺意と共に、龍眼に変わる。

「私が行きましようか？」

「……………いや、一撃喰らわしたらおいとまする。……………ナギ・スプリングフィールドオ！」

「！」

「あんな言い方したが、アレはオマエだけじゃなく、元老院や、帝
国上層部、『完全なる世界』にも該当する。」

全てが全て、ナギのせいではない。責任は戦争に加担した者全てに
あるのだから。

レンはただ、自分の行動に責任を持って欲しいだけなのだ。

「アリカ王女、アンタにはコレを渡しておく」

「っ！コレは？」

レンは、アリカにスーバーボール程の宝石を投げ渡した。

「ソイツは、王家の魔力に反応して俺に知らせる。もしアンタが幽
閉されたり誘拐されたら魔力を込める。それくらいの小事なら助け
てやる」

「そうか……………有難う」

「ッ！……どオいたしまして……」

表情が見えないように俯いて、レンは拳を地面につけて、炎熱系最強の欠片を使う。

アルトリアは、レンがアリカに礼を言われた時、嬉しそうな表情を作ったのを見逃さなかった。

「……」
『伝導、アグニッシュ・ワッタス炎神の息吹』
「」

ビキビキッ！と、赤い光の亀裂が、龍眼で補足した敵に真っ直ぐ向かっていく。

瞬間、街の中からあらゆる物体を一瞬で蒸発する巨大な火柱が上がる。

ゴオオオオアアアアア！！！！

「クツ……何だ、今のは！？魔力を全く感じなかったぞ！」

余波の突風が消えた時には、レン達の姿は消えていた。

「間違いない。あれは確かに黄昏の姫巫女。フフツ、見付けるのに苦労したよ」

レン達の姿を遠くから観ていた人形の事も、レンとアルトリアは見逃さなかった。

接触（後書き）

真名十五票

千雨 十二票

アキラ十票

さよ六票

楓五票

茶々丸六票

夕映二票

裕奈二票

のどか二票

まき絵二票

先生陣七票

真名嬢が千雨嬢を越えたアアアア!!!

アリアも人気なので、今の所はヒロインにしときます。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

アンケート待ってます！

アルトリア・ペンデュラム(前書き)

アルトリアの回。ご都合入ってますんが、勘弁してください。

ただ、一言。

どうしてこうなったッ!!??

アルトリア・ペンデュラム

side三人称

『……………これで良かったのか？』

「ああ、態々悪いな」

レン達は、最早日課になりつつある紛争地帯の鎮圧、及び怪我人の治療を行なった。今はその後だ。

「……………レン、誰と話していたのですか？」

「アルトリアか、その内判らァ。オマエこそ……………」

どうしたと問いたかったが、用件などアルトリアの表情を見れば分かる。

「……………記憶が完全に戻ったか？アーサー王」

「…貴方は本当に全て知っていたのですね……私の願いを」

「自分の存在の削除。選定のやり直し………か？」

アルトリアは目を閉じ、頷いた。

「……確かに、俺にはそれが出来ない訳じゃアねエ。時間を跳んで、オマエにカリバーンを抜かせなかつたらイイだけだからな」

「！だとしたら……」だが、俺はそんな事は絶対にする気は無エ」
「…な、何故ですか!？」

「そんな事に何の意味があるんだ？」

「なっ……!？」

アルトリアは絶句する。

自分の人生も、

願いを、

想いを、

全てを知り、それでも尚、レンはその願いを否定した。

「一つ聞くが、ブリテンの王。オマエはその願いが何を意味しているのか、わかってんのか？」

「選定をやり直す事で、滅びの道の回避できるのです！！！私が王にならなければ！ランスロットも死なず、ギネヴィアも不幸になることも……ッ！！！」

苦悩と苦情に、アルトリアは顔を歪める。涙すら浮かべる程に。

……だからこそ、レンは告げる。

その願いは間違っていると。

「確かにオマエがやり直しを叶えれば、ブリテンはまた別の行く末に行く事になっていたんだらうなァ」

「でしたら……」

「今いる、オマエの国の血を引く全ての人間を消し去ってな」

「なっ……」

もしアルトリアが、やり直しを遂げれば、アルトリアが死んだ後も生き残った人間を。

その子孫を、その生きざま全て『無かった事』にされてしまう。

全ての努力を、想いを、価値を、全て無かった事になってしまう。

「何より……」

「オマエと一緒に戦った騎士や、オマエが守った国民の子孫は今、

この時代に国がなくなったことで不幸になってンか？そして、オマエに今も助けを求めてンのか？」

レンの言葉を聞いた瞬間。

アルトリアの願いの根本が、支えが、確実に壊れた。

レンは、『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から、一本の剣を抜き取る。

「『アロンダイト無毀なる湖光』!?!」

「抜け、アーサー王」

レンはアルトリアに、最高の騎士の剣を向ける。

「!?!」

それに対し、最早条件反射になっている動きで、鎧を換装して構える。

上段から、レンは『アロンドライト無毀なる湖光』を振り下ろし、レンの剣圧で、アルトリアの体は弾かれる。

「ぐっ………!!」

一瞬でアルトリアの目の前に移動したレンに、体勢を立て直して、アルトリアは剣を振るった。

レンは、それを『アロンドライト無毀なる湖光』で受け止めず、軸とし、アルトリアの剣を振り切らせた。

それにより、アルトリアの懐がガラ空きになったが、

「インレシブ風王結界!!」

それに対して、剣を不可視にしていた風を解放して、自分を浮き上がらせることで回避した。

本当なら相手を吹き飛ばすのだが、レンに風速200メートル以下の風など当てた所で、剣圧で相殺されてしまう。

「……………ならばッ」

インビジブル・エア
風王結界で上に翔んだアルトリアがレンを両断するように振り上げ、

「ならば私は、どうすれば良かったのですか!!?」

解き放たれた黄金の剣を振るう。

受け止めたレンの足元が陥没する程の力だったが、
アロンダイト
『無毀なる湖光』
はビクともしない。

「他に……………私は、彼らにどう償えば良いのですか
……………!」

アルトリアの剣には力は入って無く、膝をついた。

もう、そこには王はいなかった。

ただ一人の、選定の剣を抜いただけの少女だった。

だが、

「へ……？」

「……な、何で……そんな、『ハア、漸くかア』みたいな顔をしてるんですか！／＼／＼」

「安心したからだ」

「え……」

「俺はその答えは教えてやれねエし、分からねエ。ただし、自己犠牲で償うなんざ言い出したら、もっペン頭ア叩いて分からせてやるだけだ」

自分には、安易な答えしか言えない。

「オマエは死ぬまで、死んだ後も、王であり続けたんだ。オマエは守ったんだろ。自分が辛くても、苦しくても、王であり続けたんだろが。」

「う………あぁ………」

「顔を上げるよ、前を見る。王の責務を十二分に果たしたオマエに、俯いてる理由なぞ、ねエンだからよ」

アルトリアの涙が溢れて、地面を濡らす。

その時、『アロンドイト無毀なる湖光』が光の粒子に変わり、アルトリアに入っていた。

「これは………？」

まるで、何かを伝える様に。

「あ…っ」

アルトリアが抱えていた重みは、嘘の様に消え去っていた。

だから理解出来た。先程の『アロンドイト無毀なる湖光』の意味を。

あれはで想いであり、願いだった。

数々の想いが交錯し、小さな言葉は表せられず、ただ一言が刻まれていた。

『……私達の誇りを、貴女に仕える事ができたと言う誉をお守りください』

「うっ……ああ……く……っ……！」

ただ、完璧な王で在ろうとした少女は、

「うああああああああああ……！！……！！」

- - -少年の胸の中で泣き叫びながら、

漸く、長い責務を果たしたのだった - - -。

アルトリア・ペンドラロン（後書き）

真名十五票
千雨 十五票
アキラ十二票
先生陣九票
さよ七票
楓六票
茶々丸八票
夕映二票
裕奈二票
のどか三票
まき絵二票
千鶴一票
古一票

千雨嬢がトップと再び並びましたね。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

メインヒロイン最大10人でいきます。

ちと多いかと思しますので、色々な意見とアンケート待ってます。

人形（前書き）

アーウェルンクス、フルボッコ回。

アルトリア出てこねえ。。

人形

sideレン

泣き疲れたのか、アルトリアは眠りについた。

方舟の中のベットに寝かせたから外敵が来ることもない。

「まったく、無理しやがって……」

あの『アロンダイト無毀なる湖光』は、円卓の騎士達の想いを『アイツ』が抽出し、構成したものだ。

アルトリアを王の責務から解放するには、俺がどうこう言っただけで済む訳じゃアねエからなア。

「レン」

アスナが部屋に入ってきた。アスナのベットは隣だから当然か。

例の如くアルトリアも、護衛の為にとか言っただけで同じ部屋にベット突っ込んできやがった。

「どオした。アスナ？」

「アルトリアどうしたの？」

心配で来たのか。アスナも随分懐いてたからな。

レンには異常な程懐いてます。

「泣き疲れたんだよ。人間っつーのは、誰しも泣きたい時ぐれエある」

「そう…私も泣けるかな？」

「当たり前だ。オマエに薬が投薬されてた効果時間がある状況で、それだけ感情があれば上出来だろ」

そオだ、人なんだ。

王だろうと何だろうと、この世界に完璧な人間なンざいねエ。

誰だってミス位はするし、失敗や間違った事もするだろオ。

重要なのはソコからどうするかだ。

オマエはどうする？アルトリア

「……消すの忘れてたか」

「どうしたの？」

「ちと忘れ事があったみてエだ」

「忘れ事？」

「あア……」

……ヒッキーの人形を、叩き潰しになア

side三人称

其処には、とある少女を追っていた人形がいた。

レン達は、方舟に入る際必ず自分達を透明化する。

つまり、分かりやすく現状を説明すれば、

「見失ったか……。いや、あれは消えたが正しいかな。転移の形跡

も見付からないとはね。」

カツン。

アーウェルンクスシリーズ、一番目は其処ブリームムにいた。

理由は勿論、黄昏の姫御子の奪取。

その黄昏の姫御子が、あの『禁忌イノセイン』の下にいと判ったのだ。

カツン。

「これはデュナミスに怒られそうだね」

より早く、黄昏の姫御子を回収しておけば、と後悔する。

自分の主である造物主ライフメーカーが、異様な迄に警戒していた『禁忌イノセイン』。

彼は、戦場に立ったのは一度きり。

立った戦場まるごと消された。奇跡的に生き残った、……いや、生かされた兵士達は恐怖のあまり、この戦争中は戦線復帰は不可能になった。

カツン。

その後、彼は紛争地域などの復興に着手し始めた。

助けられた村人の話では、魔法を一切使わずに、まるで奇跡の様に傷を癒し。水などを自在に生み出し、紛争地域では誰も殺さず鎮圧した。

彼は600年前にも出現し、同じ事をしている。

カツン。

メガロメセンブリアからは『闇の福音』。帝国や、アリアドネーからは『金文の賢者』と呼ばれるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの師だったとおぼしき人物。

何故、黄昏の姫御子を連れているかは知らないが、このままでは計画に重大な支障が出てくる。

カッソ。

「！」

そこで一番目は漸く、足音に気付き、振り向いた。

其処にいたのは5・6歳の少年。一番目は、^{ブリームム}その少年を知っている。

「『^{インゼイン}禁忌』……、君の方から来てくれるとはね」

またソレか、と、少年は心底つまらないと言いたげな表情をした。

「どオセ目的はアスナなんだろオが」

「そう、黄昏の姫御子を渡してくれないか？」

「もし俺がそれで渡すと思ってんなら、『アーウェルンクスシリーズ』ってのは、幸せ回路で溢れてるみてエだな」

六歳の少年とは思えない言動。当然といえば当然だが、不老者か何かだろう。

「やはり君は600年前の『ザ・セカント神の再来』で間違いないようだね。改めて驚くよ」

そんなもの迄出来てたか。と、レンは内心頭を抱えているが、一番ブルー目にはそんな事は分からないし、分からせない。

「黄昏の姫御子は、僕達の計画の文字通り”鍵”なんだよ。君もこの世界の現状が解れば気が変わるかも知れないけどね」

「リライト世界再編魔法発動の為に始祖アマテルの直系で、『マジック・キャン魔法無力化能力者』がセラ必要なのは解るが、リライト態々世界再編魔法使う必要あんのかねエ？」

人形のように、いや人形なのだが、感情が一切変化しなかった一番目の表情に初めて驚愕が現れる。

普通、自分達の計画の全貌を暴露バラされたも同然なのだから、驚きもする。

「……………どうやら、君を生かして帰す訳にはいかなかったようだね」

フリームム
「一番目は跳躍し、『冥府の石柱』をレンに放つ。

「……………一ぺん出来るか試したかったんだが、丁度イイか。……………
コード・オブ・ザ・ライフメーカー
『造物主の掟』、再構成」

「なッ！……………!?!?!?」

レンは、グレートグラウンド・マスターキー
『最後の鍵』を取り出し、”変型”させる。

ソレは、形を鍵から”槍”に変えた。

その槍が、インドの叙事詩『マハーバーラタ』の不死身の英雄の宝具に酷似している事など、フリームム
一番目には知るよしも無かった。

「トメイ・アルカイスアナルキアース
無極而太極斬」

その槍を振るった瞬間、石柱は空間が歪む様に消えていった。

「バカなツ……」
「グレートグラウンド・マスターキー
最後の鍵」！？あり得ない…それでは彼も…」

「余所見たア、余裕だなアオイ」

レンが、フリュームム一番目の後ろに回り込む。

『速』の欠片に、フラグメント最強クラスの身体速度が加わっているのだ。

いかに『雷天双壮』でも知覚出来ない。

「『^{パワー}力』の欠片……発動」

「しまっ……『惑星砕き』!!」

拳が命中した後、0.00001^{セコンド}秒で地面に着弾する。

「が……、はッ……」

「^{フリームム}一番目の体に、核をギリギリ傷つけない大穴が空いている。」

何故レンが、リライトで瞬殺しなかったのは理由がある。

一度完全に起動したアーウェルクスシリーズは、造物主が健在ならば短時間で創りなおせる。

最大の理由は、アーウェルクスシリーズの性能を完全に把握する為である。

「……っつーかよオ。町中からずっと付けてきたから、よっぽど性能が高エかと思って来てみたって言うのによオ」

「ハア……ぐ……」

「ンだア？ このバカみたいな三下はア」

凄王化も無しでコレとは、と、拍子抜けの表情であった。

「……化物……だね。主が……あれ程、危険視する……訳だ」

レンが持っていた槍は、鍵に姿を戻していた。

「テメエのご主人サマに伝える。世界再編魔法は諦める、とな。』
リロケート』」

ブリームム
「一番目は強制転移され、レンは方舟に向かった。

人形（後書き）

千雨 十七票

真名十五票

アキラ十二票

茶々丸十票

先生陣十票

楓八票

さよ七票

のどか五票

まき絵三票

千鶴三票

夕映二票

裕奈二票

古二票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアで
す。

夜の迷宮（前書き）

すみません。前話の本文が、後書きになっていたミスがありました
が、訂正しました。

今回はアルトリアとアスナのキャラが崩壊します。

夜の迷宮

side 三人称

「レン、ここは何処？」

「ああ、お姫サマが捕まったらしくてなあ。前にやった宝石使ったんで助けにな。土地名は忘れた」

そう、今レン達はアリカ王女が監禁されている『夜の迷宮』に着いた。

ヘラス帝国第三皇女と秘密裏に接触し、『完全なる世界』について今後どうするか考える会議の途中、『完全なる世界』に誘拐、幽閉されたのだ。

紅き翼は、『完全なる世界』に見事嵌められ、指名手配になった。

おそらく此処を目指しているだろう。

無論、警備はいるが、アルトリアとレンがいれば、殲滅は容易い。

「レン」

「ああ？」

アスナはアルトリアとレンの教育により、とても人間らしい感情を取り戻しはじめている。

何より、自分に心くれたレンとアルトリアに感謝している。

故に、

「アルトリアが変」

「ビクッ／＼／」

アルトリアの異変が気になった。

アスナの一言で、アルトリアが面白いくらい分かりやすい反応をした。

頬は紅潮し、戦いの時や何時もの凜々しい顔は見る影も無い。

「大丈夫かア？アルト」

「あ、ああハイツ！？／＼だだだ大丈夫です！／＼」

「ああ、了才解。大丈夫じゃねエ事が分かった」

あの一件以来、レンと近くに居れば居るほどこの症状（笑）は顕著に出ている。ちなみに、アルトというのは「文字数がウゼエ」というレンのメタ発言による物。

ただ、アルトリアはレン以外に呼ばせる気は更々無く、レンに呼ばれるたびに嬉々としている。

「何この可愛い生物」

「寧ろオマエがどオしたアスナ」

「こっ、主人に甘えたいけど恥ずかしくてもどかしがってるペット
みたくて」

「な、何を言ってるんですかアスナ!!? / / /」

「具体的には、レンが寝てたベッドにダイブしてレンの枕を顔で埋
めてクンクン「いやああああああああああああああああああああ
ああああああ!! / / / / / / / / / /」

逃げ出した。

正解には、夜の迷宮に突撃した。

その勢いは恐ろしく、あっという間に夜の迷宮を警備していた『完
全なる世界』の下っ端を蹴散らして行く。

顔を茹で蛸のように真っ赤に染めながら、敵を斬る様は中々にシユ
ールである。

「……………やり過ぎた」

アルトリアは顔を押しさえてしつづくまじり、しわじわのよじりた連呼がま
くっくっている。

地獄の丘のトド。

「カミングアウトが駄目だったなア」

「ゴメンアルトリア。今日のエビフライ一個あげる」

「れ、レン?!違いますよ!!あれはアスナの只の冗談であって…
…イヤでもエビフライ……………」

「まア、知ってたがなア」

「!???!?!??// // // // //」

その後のアルトリアの混乱は割愛。

「シユールウ」

「何だそりゃ」

「レンの真似」

「次やったらオマエでも叩き潰すぞ」

割愛。

夜の迷宮の壁を、アルトリアの剣で綺麗に切り取る。

「よオクーデレ王女オ、助けに来たぜエ」

「早いな、そなたがくれたコレを使ってまだ十分も経っておらぬが……クーデレとは何じゃ？」

刈り取った壁の奥の部屋に、アリカと……ヘラス皇女を発見。開いた壁から、アスナが顔を出す。

「アリカ大丈夫？」

「すまん。元気そうだなによりじゃ、アスナ」

嬉しそうな顔を見せるアリカ。まだアスナは笑う事が出来ない為、近くに寄ることしかアスナは出来ないが。

「紅き翼は……、丁度明けごろに着きそオだな。ちと早エが、飯でも食うかア」

「それは良い。是非そうしましょう」

「おお食事か！食べるぞ　！！！」

アリカと一緒にいた少女が喜ぶ。

褐色で、綺麗な角が二本生えている。

「……………何だこのクソガキ」

「クソガキ！？妾は帝国第三皇女のテオドラじゃ！無礼じゃぞ！！！」

「位なんざ興味ねェんだよ。俺に敬意を払わせたかったら、それだけ価値のある人間に成りやがれ」

「むう……………そ、そもそもお主らは誰じゃ！？」

「椅子並べんの手伝えアルト」

「ハイ」

「無視するな　！！！！！」

「おお！もぐもぐ、お主等がああ、もぐもぐ、『神の再来』ザ・セカンドなのじやっブフア!？」

「物食ってる時に喋ンじゃねエ、仮にも皇女だろうが。………そオだよ」

口に物を入れてる再中、喋ったら誰であろうと鉄拳制裁。

コレがレンの食卓のルールである。

流石に正論である上、皇女という身分なので、反論が中々出来ない。

「それで聞いたかったのじゃが、600年前もお主が確認されておるが、同一人物なのか？」

「ああ、あん時はエヴァと一緒にだったかなア。今アイツどオしてんのかねエ？」

「何！？あの『金文の賢者』の師は、お主なのか！？」

「……その『金文の賢者』が誰かは知らねエが、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは俺の弟子だ」

レンはエヴァとはアリアドネーで別れたきりなので、エヴァのその後を何も知らない。

誰かに認められた。

それだけで充分なのだ。

「……レンは一体いくつなのですか？」

「覚えてねエ。本来の時間軸に戻れば、肉体も成長すんだろオ」

「本来の時間軸？」

「また今度教えてやる、………来たみてエだな」

「姫さんッ!!」

予想より早く着いたが、紅き翼の到着である。

「遅かったなア、脳筋」

「テメエ等！やっぱ『完全なる世界』の手下だったカブツ!？」

「妾達を助けてくれた恩人に殴りかかるなバカモン!!」

到着早々誤解し、レンに殴り掛かるナギだが、アリカのビンタで沈められる。

「何回目ですか……」

「アスナ、アレには絶対なるなよ」

「
分
か
っ
た
」

夜の迷宮（後書き）

千雨 二十二票
真名十五票
アキラ十六票
茶々丸十五票
先生陣十一票
楓十票
さよ七票
のどか五票
まき絵三票
千鶴四票
夕映二票
裕奈二票
古三票

茶々丸票が急上昇し、千雨嬢がエライ事になってます。

キャストアンケートを取りましたが、友人から別作品のキャラにした方が良いとの指摘がありアンケートを中止する事になりました。

自分の身勝手に皆さまにご迷惑おかけした事、謝罪申し上げます。

ヒロインアンケートは引き続き募集中です。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアで
す。

重ね重ね、申し訳ありません。

騎士王と千の呪文の男（前書き）

ナギって、対剣士の場合どうやって戦うんだらう……？

騎士王と千の呪文の男

sideレン

紅き翼＋姫様方＋俺等で紅き翼の隠れ家（笑）のあるタルシス大陸
極西部オリンポス山にやって来た。

「じゃあ、コイツ等は姫さん達を助けに来た訳か」

「あの状況で何で気付かねェンだよ。やっぱり脳タマが著しく劣化して
のが原因かア。詠春……だっけか？リーダー変えた方がイイぜ」

一緒に食事をしている奴も敵にする思考、先走りの上、物事の視野
が狭エ。チームのリーダーとしては最悪だなア。

「最近本気で考えつつあるよ。ええと……ブレイドだったな、この
前はナギが世話になったようだな、有難う」

青山詠春が、頭を押さえながら返してくる。

言っちゃ悪イが、哀れ。

「オマエはアイツの母ちゃんかア？」

「ハハハ……」

笑いが乾いてンぞ。

「ブレイドよ」

「あ？」

アリカ嬢が話し掛けて来る。まあ、大体は内容は予想出来るが。

「我等と共に来てはくれぬか？やはり我等には、お主が「しつけエぞ。俺は確かにオマエを助けたが、そこまでしてやる義理はねエ」……そうか」

俺の一言にアリカ嬢は黙る。そこに白髪頭のオッサン　ガトウが出てくる。

「しかし、君も分かっているのだろう。このままではこの世界は、『完全なる世界』に滅ぼされてしまう。そうなれば君も……」

「知ったような口訊いてンじゃねエよオツサン。俺は『完全なる世界』の思想や方法はともかく、”アイツ”の理念は嫌いじゃねエンだよ。」

「ハア！？世界滅ぼそうって奴のり…リネン？あああつ！わかんねえけど、嫌いじゃねエってどういう事だよ！！！」

「俺はソレを調べるツつってンだよ馬鹿」

俺はそう言い終わると、踵を返す。

アスナの義理は通した。もう用は無い。

「なあ」

「あ？」

「お前、俺仲間になれ！」

……………コイツ、アリカ王女との会話聞いてたンじゃねエのか？

「ハア、ルフィ上等の台詞で悪イが、ソレはもオ断ったじゃねエか。
ホント頭トンでンな」

「知るか！行くなら俺を倒してから行けっのッ！」

ツたく。リロケートで転移するのは簡単だが、ここでトンスラこいたらまた言い出しそうだしなア。

まア、問題はソコじゃねエ。

「……貴様如きの軍門に降れと……？戯言が過ぎるぞ。貴様、我がマ
スターを侮辱するつもりか」

「へっ？」

アルトが滅茶苦茶キレてるのが一番の問題だ。

馬鹿^{ナギ}が気の抜けた声を挙げる。

何も考えてなかったよオだナアこの馬鹿。

にしても……………受肉には成功したンだが、パスはズタズタ。

未だ仮契約すらしてねエのに、何だこの忠節度は？

確かにライダーが同じ様な事を言った時も、キレた筈だが、これ程
じゃなかったよナア。

「……………フウ、分かった。だったら力ずくだ。蹴散らせ、

”セイバー”」

「了解しました、”マスター”」

side 三人称

アルトリアが、黒スーツから騎士甲冑に姿を変える。

勿論ナギが騒ぐが、そんなものでアルトリアは止まらない。

「ちよつ、何でアンタが出てくんだ！？俺はソイツに「私はマスターの剣、ならば私が戦わずして何が騎士だ。それとも、貴様はそんな事すら判らん愚者か？」

流石に、そこまで言われて引き下がる程、ナギは穏和でもなく、賢くもない。

「……………チツ、アンタには用はねえんだ。さつさと退いて貰うぜ！
マンマンテロテロ……………来れ、
ディオス・テュコス 虚空の雷 薙ぎ払え
雷の斧』！！！！」

ナギは詠唱が短い『雷の斧』をアルトリアに叩き付けるが、対魔力Aのアルトリアに、中の上の威力の魔法で傷をつけれる訳がなく。

紅き翼のメンバー（詠春以外）が何も言わないのは、ナギの行動を邪魔しても無駄だと分かっていたからだ。

「随分と嘗められたものだな……」

「無傷……嘘だろ？」

少し呆けたナギに、縮地（レンが教えた）でナギの懐に潜る。

「ヤバッ」

一閃。

ナギが避けたのは、ただの幸運だったろう。

だが、それで攻め手を緩めるアルトリアではない。

「これは……」

「スゲエ……」

「何者ですか彼女は…」

紅き翼の面々が、感嘆の息を漏らす。

嵐の様な、清流の様な、あらゆる面を兼ね備え、最強クラスの剣士であるラカンと詠春が見惚れる程の剣戟。

これが騎士王。

「ハアツ!!」

「ガツ!!?」

剣戟の嵐に耐えきれず、バランスが崩れたナギにの横っ腹にアルトリアの蹴りが入る。

アルトリアは、フツ飛ばしたナギの着地点に回り込む。

しかし、ナギも簡単にはやられない。

虚空瞬動で上に跳び、あんちよこを使用。

「百重千重と 重なりて 走れよ 稻妻

」

ナギが広域殲滅呪文の詠唱を始める。アルトリアはそれを見て、カードを切る。

「 詠春、ラカン。よく見とけ。そして刻み込め」

レンの声に、二人がハッとする。

今まで見えなかった不可視の剣が、姿を現す。

現れたのは黄金の聖剣。

アーサー王伝説の真骨頂にて、アルトリアの宝具。

その名は 。

「『^{エクス}約束された

」

「オラアッ！！『^{キリブル・アストラベ}千の雷

』！！！！」

「
勝利の剣』！！！！」

「アレが、世界最強の剣だ」

その一筋の光は、千の雷を軽々と呑み込み、

ゴッッ！！！！！！！！！！

オリンポス山の一角を根刮ぎ消し飛ばした。

「「「」」……うっわぁ」「」

「ナギの奴、死んだんじゃねエか」

「いや、生きてンよ」

クイツと、レンが指を引き寄せる様に曲げると、ズタボロのナギが煙から飛んで来る。

『サイコキネシス フラゲメント
念動力』の欠片を使ったのだ。

飛んで来たナギにボディープローを決め、龍掌でアルビレオが治療可能な状態まで治す。

「フー訳で、俺達は行く。精々足掻け、俺達も足掻く。」

「”またね”、アリカ」

「 ああ！お主達もな」

「リロケート」

こうして、レン達は紅き翼と別れた。

次に会う場所が、アスナを欠いて『墓守りの宮殿』とは知らずに。

騎士王と千の呪文の男（後書き）

千雨 二十二票

真名十九票

茶々丸十八票

アキラ十七票

先生陣十二票

楓十一票

さよ七票

のどか六票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

茶々丸がベスト3入りにッ！！！！

唐突ですが、アンケートを取ります。

このまま行くとサブヒロイン入りになる十票以上持つてる先生陣を誰にするのか。一度先生陣に票を入れた人でも投票してください。

それと、キャスターアンケートを再開します。

考えましたが、何故かどうしてもエヴァにキャラが被るので。

現在は

玉藻六票

メディア五票

まさかのスカサハ一票

前言撤回ばかりで、謝ってばかりで申し訳ありません。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

感想やアンケート、待ってます！

想定外（前書き）

敵がチート級に……………。

想定外

side 三人称

そこはある民家の近く。

「嫌だ！！俺はハーレム帝国を創るんバアギャツ！？ギ
ヤアアアアアアア！！！」

「……………ツたく。転生者つてのは、糞の掃き溜めしかいねエか？」

血の様な真つ赤な眼。何故か地面に引き摺らない、足元まである長い綺麗な白髪を首元で括っている少年。

「これで685匹目……………この時代の転生者^{クッス}は残り数匹程度
か。ここまですいとはなア」……………

目の前には何も無い。

少し影が地面に焼きついている以外は。

大戦期は、力を手に入れた転生者が力を試すのには格好の時代。

戦争中に、誰が誰を殺したなど調べようが無いからだ。

そんな転生者を殺して約700人。ハッキリ言って割に合わない仕事だと言いたげな表情を作る。

戦地を龍眼で観て蒸発させるだけなのだが。精神的に参ってしまいそうなのだ。

「はてさてエ、造物主^{ヒッキー}はどオするつもりかねエ？」

転生者を狩りながら、紛争or災害地域を復興&鎮圧しながら、元老院の『完全なる世界』との関与の証拠を集めまくっているレンは
呟く。

原作での最終決戦まで残り数日。にもかかわらず、計画の核であるアスナはレンの下にいる。

「そろそろ来んだろうがなア」

今まで襲って来なかったのが不思議で仕方がない。

そんな事を考えながら、アスナとアルトリアの元へ向かっていたレンの視界が、世界が”換わる”のを捉える。

「『エンコンバンデデンティア・インフィニータ無限抱擁』？いや、空間を閉じる結界の最上級魔法かア？」

レンは世界がいきなり変わったのに、何の動揺もしない。

それどころか、即座に分析を開始する。

「誰もいねエのは、ちと寂しいか」

ドオンッ！！！

レンを中心に、ワイロニア・フロゴシス『燃える天空』級の爆発が起こる。

そんな中、一人の黒ローブを羽織った『魔法使い』が現れる。

「……………」

ライフメイカー
造物主。

始まりの魔法使いと呼ばれる、『魔法世界』を造った『完全なる世界』の首領が降り立つ。

「ぶっ」

しかし、爆炎の中から出てきたレンは無傷だった。

というか吹き出していた。

「ギャハハハハ！！ アマテルちゃんよオ。 ンだア？その思わせ振りの登場はア？ 現実にビビッて目エ背けてたインテリちゃんとは思えねエよなア！！」

「……………私とて、”貴方”を相手にしたくはなかった。ただ、事は急務だ。濟まないが、少々ここで時間を潰させて貰うぞ。武の神よ」

それは、いじめられっ子がいじめっ子に必死で言い返している様に見えなくなってもない。

事実、^{レン}凄王と造物主との力の差は、それ程までに広がった。

レンは、唇を歪めながら周囲を見渡す。

既に龍眼を発動しているレンは、世界を隅々まで観る事ができる。

「…人形共がいねエのを観ると、ここで俺を押さえてる間にアスナア拐おオって魂胆か？」

「……………まあ、差違は無い」

「ハッ！イカれンのは一人でやれや！オマエの人形共でアルトリアをどオにか出来ると思ってンのかア？」

何考えてんだこのバカ？、と、レンは信頼の言葉を吐く。

アーウェルンクス達が束になっても、自分の従者は揺るサーヴァントがないと。

「フ……フフフ」

「あ？」

しかし、蟻と星ほどの力の差があるというのに、造物主は笑っていた。

対照的に、レンは笑いを止め、眉を潜める。

造物主のそれは、虚勢の笑いではなかった。

「確かに、デユナミス達では貴様の『剣』を潜り抜ける事は不可能だろう。アレと手を組むのは些か躊躇したが……」

「……………何言ってるんだ？」

理解出来なかった。

一体何が造物主に自信を与えている？

「今の貴様は私を殺す寸毫の時すら惜しいはずだ」

「……………何だと？」

「……………転生者、というのだろうか？」

「……………トメー・アルカイスアナルキアース無極而太極斬」ツツ……………!!」

それからのレンの行動は早かった。

自身の得物で結界を断ち切り、世界を穿つ。

「フ、足掻けよ『アダム』」

結界魔法から力業で抜け、二人の元へ向かった。

だが、レンは先程の造物主の言葉を即座に否定する。

転生者？フザケンじゃねエ。

それは、まだ幼さの残る少年の姿をしていた。

紅い布を腰に巻き、同じく紅い布をバンドナのように頭に巻いている。

裸の上半身と顔……目に見える素肌の全てに黒い刺青が刻まれていた。

「オイオイ？救世主^{ヒーロー}ってのは遅れてやって来るツツーけど、コレは遅すぎじゃね？」

『この世^{コノセ}全ての悪』は、転生者^{そんなもの}では済まないど。

想定外（後書き）

千雨 二十五票

真名二十票

茶々丸二十二票

アキラ十八票

楓十一票

さよ八票

のどか六票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

玉藻十票

メディア六票

スカサハ一票

刀子四票

シャークティ三票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

感想、アンケート待ってます！

宣戦布告（前書き）

かなり無理矢理、ご都合主義ッ！！

なにより皆さんの反応が怖い

宣戦布告

side

レンはそれを知っていた。

第五次聖杯戦争の約70年前に起きた第三次聖杯戦争の際にアインツベルン家に召喚され、敗れた後に聖杯に吸収されたサーヴァント。

悪で在れ、そう願われ生贄にされ死んだ時、その本質に絶対悪の因子を持った英霊が誕生した。

憎まれることで世界を救った英霊……。

だが、何故そんなものが『ネギま』^{こゝ}いる？

転生者……と考えれば簡単だ。

しかし、レンの龍眼は転生者を転生者であることを観抜く事も出来る。

その眼が訴え掛けてくるのだ。

『コイツは違う』……と。

それ以上に、レンが簡単にアルトリアやアスナに転生者の接近を許すか？

レンは半径数十キロ圏内に転生者がいれば認識出来る。

事実、目の前に居てもコイツを転生者として認識出来ない。

つまりコイツは、転生者じゃない。

しかし、仮に復讐者^{アサエンジャー}として、最弱の英霊がアルトリアと遭遇すれば潰されるはずだ。

思考が淀みなく働いている時、それが視界に入った。

その、近くにアルトリアが傷だらけで倒れている姿を。

「ッー!!」

レンは思わず怒りの沸点を越えそうになるが、思いとどまる。

ここでキレたらアルトリアも巻き込まれて死んでしまう。

アスナは既にここには居ない。おそらく人形共が連れ去ったのだろう。

今出来る事はコイツからどれだけ情報を引き出せるか。

「……………」
アンリ・スエ「この世全ての悪?」

「オオツ！正解正解大正解！！流ツ石モノホンの神サマ、しかも管理者から選ばれた特別スペシャルとききたモンだ。造物主できそこないとはやっぱ違うねエ。そ、俺は『この世全ての悪』アンリ・スエ。間違っちゃいねエよ」

ゾロアスター教の悪の容認者である神霊と自称する少年は、口を三日月の様に裂いて笑う。

「何でこんなトコいんだよ……。」

聖杯はブツ壊れて、受肉出来なかったんじゃないのかよ！そもそも俺とオマエじゃア『世界』が違うだろオが！！何でアスナを拐つてやがる！？」

ネギまも漫画の世界だから、f a t e が有ったっておかしいくはないが、それが『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』がここにいる理由にはならない。

「ああ、それねそれ。俺はあの時、確かに現界出来ずに消し飛ばされた。そこに転がってるオマエのお気^{サーヴァント}に入りにな」

「だが、吹き飛ばされた位じゃあ合計12体分のサーヴァントの溜まりたまった魔力は消えねえ」

「……………」

「つつつても、聖杯の欠片がなけりゃ宝の持ち腐れだ。あの？『世界』じゃあ俺は現界出来ない。仮に有ったとして、また修正力が働いて失敗するだろ。この『世界』にもアンタがいる様に」

「だったら簡単だ」

この世^{アンリ・マユ}全ての悪はどこぞの政治家の様に大仰にアピールする。

「聖杯の欠片が必要のない器がある『世界』に行けばいい。『魔法』ぐらいの奇跡を起こせるだけの魔力が大聖杯^{オレ}の中にはあったからな。いやはや、並行世界様々だぜ」

「了才解。つまりソイツは俺がオマエの死体でギネス取れつつウ解釈でイインだな」

「おつと怖い怖い、そんな眼をむけるなよ。まあ、確かにこの世界にも修正力があった。しかもとびきり強烈な奴が目の前に。でもまあ、悪運は俺に味方したぜ？」

「……俺がオマエを殺せねエとも言いてエのか？」

「だってお前忙しいじゃん」

アンリ・マユの言葉は、実に今のレンの状況に合っている。

「只でさえ転生者つつ馬鹿共のせいで忙しい上、今は世界の終わりの瀬戸際だ。それらをイッペンに終わらせて更に俺を止める^{アンリ・マユ}なんざ、どこのマゾゲーだって話だ。もしくは難易度デスクラスの戦争ゲーか？」

アンリ・マユは、とても軽く言うが、実際現状の問題は山積みだ。

最悪、造物主は紅き翼が何とかするとして、オスティアの崩壊はレンならどうとでもできる。だが、それではアスナが最低2年は封印されてしまう。

227

更に元老院も気になる中、それらを止めるのがお使い程度に思えてくる『この世^{なんだい}全ての悪』が現れた。

レンは確かに、これでもかと言うほど追い詰められている。

だが、

「それがどオした？」

そんなことではレンは揺るがない。

「造物主を殺す、元老院も潰す。オマエを現界させねエ」

「理想論だな」

「出来ねエと思うか？」

アンリ・マユは嬉しそうだったが。

「マジでやりそうだな。そりゃそうか、どこぞの人格破綻者ことみねきれいの様にやアいかねえな。ま、あんな奴の真似事出来る奴がいたら終わりだかな」

「……………ぶぜ」

「…はい？」

「
余裕ブツこいてる所悪イが……首、飛
ぶぜ？」

ザンツ！！！

瞬間、アンリマユの頸と胸が切り離された。

別にレンが何かした訳ではない。

斬ったのはアルトリアだ。

「ハアツ……ハアツ……ぐッ……」

「アルトツ！！」

レンは剣で何とか体を支えるアルトリアの元に走った。

「よく生きてた、アルト」

「すみません、アスナが……クツ」

レンがキレずに済んだ要因の最大の要因は、アルトリアの眼は死んでいなかった事だ。

もしアルトリアが死んでいたら、造物主には悪いが、魔法世界は終わっていただろう。

レンは自分に注意を向け、満身創痍の状態でアルトリアがアンリ・マユを仕留める機会を窺っていたのだ。

だが、

「まだです……レン。奴はまだ……」

「分かってる」

こんなモンじゃ終わらねエ。

「痛つてエなあ、いきなり首飛ばすコタアねえでだろ。てか、バレてたか」

その言葉を放つたのは、紛れもなくアンリ・マユだった。

「当たり前エだ。こんなんで終わるンだったら、オマエなんぞにアルトが傷食^{ダメージ}らう訳ねエだろオが」

切り落としたアンリ・マユの首と胴体が動いて^{.....}いる。

胴体が、首を拾い。くっつける様に合わせると、泥の様に混ざり合
い、再生している。

「この世全ての悪は本来、人間の中に悪意がある限り、不変不滅の存在。その力が、今は不完全として現界してんのか」

そうでないとなが、アルトリアに勝てる要素が無い。

「またまた正解。つても、この魔力はオレの意思を出させるだけの媒介に過ぎねエ。もう一発エクスカリバー食らわせたら消滅するだろうがな。だが、大聖杯が有る限り何度でも顕現可能だ」

「つまり、大聖杯を潰したら終わりってトコか」

「人間の中に悪意が消滅したらな」

人間の憎しみがこの世に存在する限り、物理魔力的破壊では、『この世全ての悪』は殺せない。

「ああ、後は造物主と組んだ理由だったな。簡単だよ、その方が手っ取り早かったからだ」

「……………？」

「態々造物主と組んで、黄昏の姫御子を拐った。ここまで言えば、

「アンタなら分かるだろ？」

「……………まさか」

アンリ・マユが、裏切るかもしれない造物主と態々手を組んでも、アスナを拐った理由。

考えてみたら、そんなもの一つしかない。

「黄昏の姫御子が、聖杯オレの寄り代としては最高なんだよ」

「殺すッ！……！」

ドオンッ！……！

レンが睨むだけで、アンリ・マユの地面が吹き飛ぶ様に破壊される。

しかし、

「アハハハハハッ！！！！無駄だ無駄！！
言ったら、この”オレ”は末端とはいえ、『この世全ての悪』だ！
その殺意がオレを生かすんだぜッ！！！！」

即座にアンリ・マユの体が、泥から再構成される。

「それにオレの事はつかじやなく、自分の従者の心配した方がイイ
ぜ？」

「ッ！？」

「あぁっ！！！」

直後、抱えているアルトリアが悲鳴を挙げる。

アルトリアの体が、茨の様に黒く侵食していつているのだ。

「まさか

黒化！？」

「またまた正解。進路希望を探偵にした方がイイな、アンタ」

「……………テメエ……………」

「にしても……………随分黒化が遅いな。あ、成る程！僅かにオマエの魔力が供給されてるからか。アララ残念、セイバーは奪えなさそうだn……………オイオイ」

思わず、アンリ・マユが冷や汗を流す。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイツ……………！！！！！！

「『ディーンドライブプロミネンスフレア アクセラレーター
速』 + 『火』 in 『一方通行』」

「それただの光速プラズマ爆撃だよな！？」

レンの前方。半径数十キロが吹き飛ぶ。

いかにアンリ・マユの末端とはいえ、既に何発かアルトリアの約束エ クスカリパーされた勝利の剣を食らっている。その状態でこれを喰らえば、大聖ほん杯たいに帰らざるえないだろう。

『アン・リマユこの世全ての悪』は、宣戦布告した。

アルトリアを黒化で侵食し、アスナを拐うという最悪の挑発をして。

この接触でこの戦争の結末は大きく変わった。

世界は体験するだろう。

復活した邪神、怒り狂った武神。その二人の神々の戦いを。

確かに、どれだけ攻撃しても消滅させても、人間にほんの一片でも悪意が存在している状態で、『この世全ての悪』は滅ばせない。

レンのアレを除いて。

宣戦布告（後書き）

千雨 二十五票

真名二十一票

茶々丸二十二票

アキラ十八票

楓十一票

さよ九票

のどか六票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

玉藻十票

メディア六票

スカサハ一票

刀子五票

シャークティ三票

しずな一票

レンによるブチギレ世界崩壊フラグ立ちました。（オイ

原作ブレイクのタグ、追加した方がいいのかな？

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

アンケートや感想、待ってます！()():():():()

本契約（前書き）

やっちやっただぜ、
、

悪で、あれ。

ドクンッ、

私は瞬時に理解する。理解させられる。

「これが……この世^{アンリ・マユ}全ての悪……」

幾千、幾万、幾億もの怨鎖の声と共に、泥で出来た腕が私に伸びてくる感覚。

分かる。これは私を呑み込むつもりだ。

泥は、私の四肢を掴み、呑み込もうとするが、何かに弾かれた様に霧散する。

微量な何かが、私を守ろうとする。

長い間傍にいたから分かる。これは、レンから供給されてくる魔力だ。

だが、ラインが不明瞭な為に、その膨大な泥が魔力ごと呑み込む様に、口を開ける。

これに呑み込まれたら最後、私の体が、私の魂が、私という存在が汚染される。

奴の操り人形にされ、マスターに刃を向けてしまっ。

「ふざけるな……ッ」

私の主に、私を救ってくれたあの人に刃を向けるだ……!?

そのような真似をするくらいなら、

いっそ

!!!!

「アルト！アルトッ！！」

意識が目覚め、瞼が開きレンの顔が見える。

表情が、焦りと悲痛に歪んでいる。

馬鹿者だな、私は。

「アルト！！返事しやがれッ！」

「ハアッ……ハアッ……レン、すみま、せん。不覚を、とりま
した」

レンにそんな顔をさせるなんて、自分が嫌になる。

下半身の感覚が痛み以外なくなっているが、そんなもの、レンに苦
痛を与えている事に比べれば気にも止めなくなる。

「気にすんな、んな事アどオでもイイ。今は
「レン、頼み
があります」「……………何だ？」

「私を
殺してください」

「……………俺を馬鹿にしてんのか？」

「このままでは、貴方に剣を向けてしまう。それだけは……………そんな事をするぐらいなら」

死んだ方がマシだ。

ズグーン！！

「クッー！レン…………早くッ…………」

侵食速度が跳ね上がる。レンの魔力の恩恵の限界だろう。

レンは暫く目を閉じ、開く。

「……………しゃアねエ、か。目エ閉じろ、アルト」

ああ。最後迄、貴方と共に戦えなかった事が心残りですね…………。

レンの指示通り、目を閉じる。

「最後じゃねエよ」

不意にそんな呟きを聴いた時、とある箇所から感触があった。

チュツ。

.....チュツ？

唇から。

『本契約』

.....
へっ？
//
//
//
//
//
//
//
//
//

本契約（後書き）

突然ですが、『ゲート・オブ・バビロン 王の財宝』の宝具とかの募集をします。

自分で知ってる宝具少ないので、「こういつ伝説のこういつ効果の宝具アルヨ的な感じをお願いします。

それと、次の更新が少し遅れます。もう一つの作品が2、3話出せたら再開しますので、ご容赦ください。

千雨 二十六票

真名二十一票

茶々丸二十二票

アキラ十八票

楓十一票

さよ九票

のどか九票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

玉藻十一票

メディア六票

スカサハ一票

刀子五票

シャークティ三票

しずな一票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

殺戮の決意（前書き）

やっと再開出来ました。

つっても、投稿できたが短すぎるといつ体たらく。申し訳ありません。

殺戮の決意

sideレン

契約した瞬間、アルトを蝕んでいた黒化の浸食が、綺麗に吹き飛んだ。

アルトと、完全にパスが繋がった事が分かる。

「レ、レレレレン？／／／何で、何を　いや、何故！？」

アルトは予想外の俺の行為に、かつて夜の迷宮に突撃した時より赤面している。

「落ち着け、っても無理かア」

「これが落ち着いて居られますか！！／／／／／」

「今のは魔法式の魔力パスを繋げる方法だ。どオやら世界の抑止力である俺の魔力は、この世界最大の異物であるアンリ・マユイレギュラーに凄まじい耐性が有るみてエだしな」

アルトがハツとした顔を作る。

本来、サーヴァントがアンリ・マユの侵食を受ければ、瞬く間に黒化すんだろ。

あんなズタズタのパスで、契約する時間を稼げたんだ。その時点で、俺の魔力がアンリ・マユに耐性が有ることを証明している。

254

「ハイ。レンとのパスは、自覚出来る位に強固に繋がっています」

俺の問いに、先ほど真っ赤に染まった顔から、騎士王としての顔に変わる。

まだ少し赤いが。

本契約したことで、もう二度とアルトはアンリ・マユに黒化される事はねエ。

全く、こんな事になんならさっさと血で契約しときゃよかつたぜ。

「あの時、宝石を用意する暇アなかったからなア」

「？」

仮契約じゃアなく、本契約にしたのは、仮契約では最悪黒化を防がない可能性があつたからだ。

本契約は、仮契約でパスを交わすのよりも強い繋がりも得られる。

仮契約で助かりませんでしたじゃ、笑い話にならねエからなア。

「ほら、コピーカードだ。コイツは何かと便利だし、アーティファクト 自分専用の武器が出せる。アダアットつツてみる」

俺はコピーカードを無造作に投げ、アルトは綺麗にそれを受け取る。

「ハイ。来たれ（アダアット）」

カードが光り、アルトのアーティファクトが出てくる。

「……………なッ!？」

「へエ……」

現れた二つの宝具。

一つは、全て遠き理想郷^{アヴァロン}。エクスカリバーの聖剣の鞘。

二つ目は、勝利すべき黄金の剣^{カリバーン}。アルトリアが石から抜いた選定の剣。

出来すぎッちやア、出来すぎだなア。

アルトは暫く放心してたが、ある程度冷静になったようで此方に視線を向けてる。

兎も角、アルトの黒化は完全に防げた。

「他に異常はあるか？アルト」

「アンリ・マユの侵食は無くなり、レンからの魔力供給も充実して

います。ただ

「

アルトが言葉を濁す。

俺はアルトに異常が、いや異変が有ることを知っていて、わざとこの質問をした。

万一に備え、アルトをより強くする為に。

「体中から、力がみなぎっているんです。魔力供給だけでは、到底説明がつかない程に……！」

そう。今のアルトは、以前には比べられない程に強くなっている。アンリ・マユから受けた傷も跡形も無く癒えている。

成功だ。

「ソイツは後で説明する。今はアスナだ」

「
！」

龍眼で確認したが、完全なる世界等準備万端みてエだ。

「造物主は、世界再編成魔法を使うまでアンリ・マユにアスナは渡さねエだろ。だが、奴が黙ってるとは思えねエ」

だからって、造物主がいる状況で不用意に動こうとする事アねエだろオなア。

「紅き翼が造物主達の相手をしている間に動く筈だ」

おそらくその隙を突いて、リライトに細工。もしくは世界再編成魔法の術式自体を汚染するか。

「どっちにしろ造物主じゃア、アンリ・マユは止められねエ。つまり」

「『完全なる世界』の目的達成時が、『この世全ての悪』の受肉迄のタイムリミット……………!!」

ゾロアスター教の悪の容認者である邪神。

人間の中に悪意がある限り滅びる事もなく、60億の人間を呪う宝
具を持ったサーヴァントが誕生する
！！

「
まア、んな事アどオでもイインだよ」

「ええ、どうでもいいです」

魔法世界の終わり？不滅不変の邪神？

それがどオした。

「ブチ殺しの準備は万端かア？アルト」

アイツ等は、俺の身内に手エ出した。

「無論です」

叩き潰すのにそれ以上の理由は要らねエ。

そして俺達の殺るべき事はただ一つ。

「さアてとオ。最も救いから遠い方法で、何もかもを血みどろに救ってやる」

殲滅だ。

殺戮の決意（後書き）

スイマセン、酷過ぎました。

次話で完全なる世界壊滅。久しぶりのレンオーバーキルタイムです。

感想、アンケート。待ってます。

墓守り人の宮殿へ（前書き）

レッツ、大盤振る舞いッ。

的な話。

墓守り人の宮殿へ

side 三人称

世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』。

それを見ているのは『紅き翼』。

帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備が準備され、『コスモ・エンテレケ完全なる世界』との、魔法世界の運命を決める戦いが始まるうとしていた。

「……不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

軽口をたたき合う二人。

「それにしても……、姫子ちゃん攫われるとはな。アイツ等、俺達よりずっと強いくせして」

「数の暴力で彼を倒せるとも思えません。何らかの策を弄したらか、
或いは……」

『インゼイン禁忌』と呼ばれた少年が、数の暴力程度で何とかなる筈がない。

だが、今更考えてもしょうがない。ナギは、敵の本拠地を睨む。

「ナギ殿！ 帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備完了しました」

「おう」

アリアドネー総長、セラスが報告をしに現れる。

それでも、混合部隊の数倍以上の数の悪魔がいる。まともに戦えば
甚大な被害は免れない。

最悪、悪魔達が”鍵”持ちだったなら、抑え込むのが精一杯だろう。

作戦としては、混合部隊が悪魔を抑えている間に、紅き翼が完全な

る世界を倒す、というものだ。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ！ ……それで、あのナギ殿……」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

「おお？ああ、いいぜ？それくらい」

「そ、尊敬していました！」

緊張感の無い会話があったその後、ガトウから通信が入る。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

それにアルビレオが答える。

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵、『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです（しかし、彼等から一体どうやって彼女を……？）」

そんな時だった。

「よッし！行くぜ野郎共！……！」

それが来たのは。

ザワッシシシシッ！……！……！

「ッ！……！……！？」

それは、

”直感”ですらなかった。

もっと原始的な……、動物としての本能に似た”何か”……。

『完全なる世界』が魔法世界の再編成を進め、魔法世界人にとっては世界が滅びようとしている中であって、それでも尚
。

そ………ん………な………事………よ………り………も………！

ゴシッ

白。不純物が混ざっていない雪よりも龍の尾の様な白い長髪。それに比例するかのような黒い服。

初めて彼が戦場に現れた時と変わらない姿。だが、

『違った』

それが、今の彼を見た紅き翼の心からの本音。

確かに一度紅き翼は、その圧倒的な『死』体験した事がある。

ゴツッ

だが違った。

アレは、何の感情も込められていなかったのだ。

あったとしても、精々親と対面出来るという好奇心程度だろう。

ゴツッ

だが、今の『死』に寄せられた感情モノが全く違った。

墓守の宮殿に向けられる絶大な憤怒と憎悪。ソレだけで、世界を押し潰されると錯覚する程の、

殺意。

ゴツッ

悪意を糧とするアンリ・マユに向けるモノではなかった。

誰も、動けなかった。

指を動かす関節の音すら、まばたきのたてる音すら怖れた。

心臓ですら、止まってくれと願った。

彼の傍に付き従っている騎士は、サーヴァント どうして平気なのか？

それが、紅き翼達は不思議でならなかった。

彼は、悪魔達を観た後。手を悪魔達の奥の墓守り人の宮殿に向けて、右腕を突き出す。

「エデنزシード、解放」

袖で見えないが、彼の両肩に『ステイクマータ 聖痕』が浮かび上がる。

「 『第五波動』 」

ゴガアアアアアアアアアアアッ！！

「……………はッ……………!？」

直後、混合部隊の数倍の数の悪魔達は、一撃で一掃された。

その威力は、悪魔達を消し飛ばすだけで留まらず、墓守り人の宮殿の三分の一を抉り取り、直線上の全てを消滅させた。

無論、レンはアスナが何処に居るか龍眼で確認しての攻撃だったが。

「……………行くぞ、アルト」

「はい」

ナギ達は、彼等が墓守り人の宮殿に向かって跳ぶまで、動く事が出来なかった。

跳ぶ、と言っても、レンは兎も角アルトリアは空を飛べない。

勿論、オステイア沿岸部から墓守り人の宮殿まで跳ぶにはあまりにも遠い。出来なくもないが、その分速度が落ちる。

そこでレンは足を用意した。

『ゴルディアス・ホイール
神威の車輪』。

2頭の飛蹄雷牛ゴッド・ブルが牽引するチャリオット。それはもともと、ゴルディアス王がオリュンポスの主神ゼウスに捧げた供物であつたのを、征服王イスカンドルが佩刀で繋いでいる紐を断ち切って自らのものとした。

陸の移動は勿論、海や空すら征服し駆けるイスカンドルがライダークラスにたらしめた宝具で、レン達は進む。

だが、悠々と本拠地に行かせるほど造物主も馬鹿ではない。

宮殿を取り囲む様に飛んでいる九頭の竜。

瞬時に龍眼で竜の構成情報を『観る』。

レンから本拠地を守る為なのか、純粹魔法生物ではなかった。一体
一体が、古龍種並の戦力を有していたが、

「アルト、コレ渡しておく。最低四頭は狩れ」

レンは、ゲート・オブ・バビロン王の財宝からとある原典を取り出す。

「わかりました」

『メロタック原罪』。

カリバーン選定の剣の原典。

魔剣・太陽剣グラム：北欧神話における選定の剣であり、北欧最大の英雄シグルドが所有した。ドイツの叙事詩『ニーベルングの指輪』ではバルムンクの名で呼ばれる魔剣。

「最強の聖剣」に匹敵する「最強の魔剣」であり、竜殺しの特性も有している。

「ハアアアア！！」

古龍討伐にはうってつけである

その剣を、レンから供給されている無尽蔵の魔力と、強化したアルトリアの魔力放出が合わさった力で、古龍を両断する。

その力は、既に神の領域を侵していた。

一方レンは、二つの剣を手に入れている。

『トツカノツルギ
蛇竜斬り伏す嵐の剣』

スサノオが八岐大蛇退治に使用した神剣。十束剣をレンが改造した物だ。

もう一振りには『アスカロン力屠る祝福の剣』

聖ジョージの伝説で、英雄ゲオルギウスが竜の生け贄として差し出された王女を救う為に魔女から授かり、竜を打ち倒した剣。

その二振りの竜殺しの剣を、レンは古龍に向かって振るう。

「
『インテルフェクトウム・ドラーコーネース竜殺し』」

一閃。剣が二つなので二閃の筈の剣閃が、実際には十閃有った。

キシユア・ゼルレッチ
多次元屈折現象。

しかもかの佐々木小次郎の燕返しが三閃だったのが、レンのは五閃。

レンは、欠片や異能に満足などせず、エヴァと出会ってからずっと己の武を研鑽していた。

神格としての才能と、ただひたすらの努力によって、レンはこの領域に到達した。

ダメ押しに、アスカロンとトツカノツルギの複合真名解放。

全ての古龍を蹴散らし、アルトリアがゴルディアス・ホイール神威の車輪に戻るまで約0.9秒。

紅き翼に匹敵する”九頭せんりよくの古龍”が、瞬殺。

古龍九頭では、余りにも役者不足だった。

そして、目標に到達した。

「
『ヴィア・エクスブゲナディオ遙かなる蹂躞制覇』！！！！！」

チャリオット型宝具「神威の車輪」による蹂躞走法で、何重もある魔力障壁と、防壁がいとも簡単に走破される。

ゴガアアアン！！！！！！

「全く……その壁は広域殲滅呪文でも耐えられる作りにしたのだけれどね。その力には恐怖しか感じないよ」

「知ったことが、オマエ等とくだらねエ問答する気は欠片もねエ」

レン達を待っていたのは、又もや九体の人形達と、

ライフメーカー
造物主。

「クズ共！！！！」掃してやるから横一列に並べッ！！！！」

墓守り人の宮殿へ（後書き）

今回は、宝具のオンパレードでした。

星の来訪者さん、ナタナタさん、宝具アンケート有難うございました！

千雨 二十七票

真名二十二票

茶々丸二十三票

アキラ十八票

楓十二票

さよ九票

のどか九票

まき絵三票

千鶴五票

夕映三票

裕奈二票

古三票

玉藻十一票

メディア六票

スカサハ一票

刀子五票

シャークティ三票

しずな二票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

黄金のサーヴァント(前書き)

敵がどんどん増えていく(笑)

黄金のサーヴァント

side 三人称

「アルト、アスナを」

「わかりました。御武運を」

レンがそう言うと、事前に位置を伝えられているアルトリアが、アスナの元へ向かう。

「行かせると思っかい？
ヴァンゲイト」

ヴィシュ・タル　リ・シュタル

「ト・シュンホライオンディアコネート
契約により我に従え」

ブリームム
一番目の始動キーが引き金になり、もう一体の人形も詠唱を始める。

「地割り来れ　千丈舐め尽くす　灼熱の奔流！！滾れ！　進れ
赫灼たる亡びの地神！！」

ホ・テュラネ・フハダダネサ由ウネーカタル尊者セネー・ロンファイア
「炎の霸王来れ浄化の炎燃え盛る大剣ほとばしれよ」

ビュール・カイ
ソドムを

テイオン・ハ・エベ・フレゴン・ソド&マルト・トウス
焼きし火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に」
エイズ・クーン・タナトゥ

「『ウーラニア・フロゴシス
燃える天空』！！」

「『引き裂く大地』！！」

二人の人形の最上級魔法が、アルトリアに襲い掛かる。

「『熱吸収』」

「！？」

だがその魔法はどちらも熱を使用したもの。つまり熱エネルギー、レンが吸収しない筈がない。

「魔法を……吸収……した……？……ツ！？」

人形が少し動揺している所に、音速と化したレンの手が迫る。

人形の胸ぐらを掴み、先程吸収した熱を零距离で解き放つ。

「『第四波動』」

ゴガッ！！

その熱線は、人形の体を呑み込み、核を破壊され、蒸発する。

「クツ……！！」

「どオした？まさか俺の身内に手エ出しといて、リライトで楽に消えれるとでも思ったかア？」

レンから莫大な、それこそ一人で魔法世界を維持出来る程の莫大な魔力が、気が溢れ出し、安定を求めて龍^{カタチ}を作り出した。

「甘エよ」

「^{ト・シユンボライオン}ツ！！^{ディアコネット}契約により我に従え！！^{バーサイス}全ての^{ゾーサイス}命ある者に^{トシ・イ}等し^{ソシ・タナトシホス}き死を其は^{アタラクシア}安らぎ也^{コスミケー・カタストロフエー}『おわるせかい！！』」

「^{モイ・バシレク・ウーラニオセゲネツアイトルース}高殿の王！！^{リリアキス アストラ・フサト}来れ巨神を滅ぼす^{キーリブル・アストラベ}燃ゆる立つ雷霆百重千重と重なりて走れよ稲妻！！^{ケラウネ・ホス}『千の雷』！！！！」

余りの威圧感と殺意の笑みで、焦る様に人形が魔法を放つ。

だが、レンに力押しは通じない。

「なッ!？」

魔法がレンに触れた瞬間、反射されて人形を襲う。

「がああああああ!？」

無傷のレンは、五つの宝具を取り出す。

『ゲイ・ボルグ』

因果の逆転により、相手の心臓に槍が命中したという結果を作り上げてから槍を放つという宝具。

二頭の海獣「Coinchenn」と「Curruid」が争い、敗れた方の骨をつかってボルグ・マク・ブアインがこの槍を作りげた。

その後、影の国の女王スカアハによって若きクー・フリーンに授けられる。ゲイ・ボルグは銚のような形状をしており、投げれば30の鏃となって降り注ぎ、突けば30の棘となって破裂する。クー・フリーンはこの槍を足を使って投擲したと言われており、ゲイ・ボルグを槍の名ではなくこの投擲法の名とする説もある。

『ブリューナク
轟く五星』

ケルト神話に登場する武器。

トウアハ・デ・ダナン（ダーナ神族）のエリン四秘宝の1つである魔法の槍。

「貫くもの」の意で、太陽神ルーが所持する。

この魔法の槍を振るう姿から、彼は「長腕のルー」と呼ばれた。

穂が5本に分かれており、5つの切っ先から放たれた光は一度に5人の敵を倒したと言われているが、これはルーが別に所持している「五つに分かれた矛」と混同されたためであると思われる。

その能力は「必ず勝利をもたらす」だとか「投げると稲妻となって敵を死に至らしめる灼熱の槍」などと言われ、生きていて意思を持っており、「イヴル」と言うと自動的に敵に向かって飛んで行き、再び「イヴル」と言うと手元に返って来る能力があるらしい

『グングニル
大神宣言』

北欧神話における主神オーディンの持つ槍。

グングニルはドヴェルグの鍛冶イヴァルディの息子達によって作り出され、オーディン、トール、フレイに品定めされた後、オーディンへ渡された。

槍の柄はトネリコという落葉樹から作られ、穂先にはルーン文字が刻まれている。

『フルンティング
赤原獵犬』

古代イングランドの叙事詩『ベオウルフ』に登場する剣

剣として使用した場合の機能は不明だが、矢として放たれた場合は例え弾かれようと射手が健在かつ狙い続ける限り標的を襲い続ける、赤光を纏った魔弾と化す。
レンはそれを投擲武器として改造した。

そして、『グレートグラント・マスターキー最後の鍵』とインド叙事詩の不死身の英雄の槍、更には乖離剣エアを事前に合成させて創った、レンだけの宝具。

神槍カルナ。

「
『ブラフマーストラ梵天よ、地を覆え』」

ブラフマー神の名を唱えることで敵を追尾する事で必中するが、呪いにより実力が自分以上の相手には使用できない制約があるが、レンが合成させた結果、リスクが消失した。

全てが回避不能な必殺の武器だ。

拳がるのは人形の悲鳴、断末魔。

普通は英霊でも、複数の宝具を同時に真名解放するのは流石に魔力が足りないため不可能。

だが、龍拳で大気を収斂させて魔力を精製させているレンには、何の問題も無い。

レンに魔力切れを起こさせるには、世界中の空気を無くさなければならぬ。

しかもレンは、世界からの魔力供給バックアップがある。

つまり無尽蔵。その馬鹿げた魔力を許容量限界までブチ込んだ真名解放だ。

人形風情が生き延びる道理が、無くなってしまった。

しかしその内七体分の人形が、重傷ながら生き延びている。

宝具は自動的に『王の財宝』に収納される。

だが、生かされている。

それは何故か？決まっている。

一撃で仕留める気が最初から無い。

自分の身内に手を出した者に対して、この程度で終わらせる気がサラサラ無い。まあ、別の理由もあるが。

「さアてとツ、始まりの魔法使い如きが摂理代行者に喧嘩を売る根性オ。もう一度見せて貰オかア？」

すると

ゴガンツ！！

爆音を立てながら、『紅き翼』の面々が現れる。

「見つけたぜ、テメエ！！」

「紅き翼か……クツ、この状況で面倒なのが来たね……」

人形たちはかなりの深手を負っているが、ナギたちは待つてはくれない。

そんな紅き翼と人形達には目もくれず、カルナを手にして、いつの間にか移動している造物主に突っ込む。

造物主は魔法陣を展開させて、第四波動と同じ太さの魔法を放つ。

おそらく何らかの不純物が混ざっているだろう。

でなければ完全魔法無力化能力者であるレンに、二千年の経験がある造物主が魔法など放つ訳がない。

「『ディーンドライブフォックスハウンド
D・D・F』」

それを『スピード』の欠片の推進力と、自身の完全魔法無力化能力で、

魔法を貫いて造物主に到達する。

「遅ッセエンだよッ!!」

そして、造物主に放たれた掌底の質が違った。

「『ヒート・エクスプロージョン』!!!!」

触れたものを、超振動　　分子振動で、破壊する一撃。

「ガアッ!!」

吹き飛ばされた造物主は、ライフメーカー、ヒュン、と転移し、何処かを向く。

黒い光線のような魔法はレンでは無く、アーウェルンクスとナギを貫

いた。

そして、そのまま強烈な攻撃を放ち、戦闘不能へと追い込む。

「随分余裕があるみてエだが、今の状況わかってんのか？」

余所見をしている造物主に、ドラゴンボールヨロシクの蹴りの連撃を御見舞いする。

その一撃一撃の威力が尋常じゃない。その連撃数が六十を越えた辺りで、造物主は墓守人の宮殿の頂上部に墜ちる。

……………勝てない。

魔法は無力化、質量攻撃は反射され、それ以前に全てかわされる。

攻撃が通らない。

造物主は、始めからわかっていた。

「何故だ……」

「あ？」

「何故だ！！！貴方にも分かっている筈だ！！このままではこの世界は滅ぶ！」

二千六百年間の絶望を吐き出す様に、叫ぶ。

「この世界に存在している人間は、火星の大地に放り出されてしまふ！！！！ならば、それらの人間を救うにはこの方法しか無い事は、貴方にも分かっている筈だ！！！」

叫ばずにはいられない。

「全てを満たす解は無い！ いずれ彼らにも絶望の帳が下りる。貴方も例外ではない！ いくら神でも、私に出来ない事が、人である貴方に出来るのか！？」

「出来るに決まってるだろオがッ！！！」

造物主の頭を、容赦無く地面に叩きつける。

「がはっ…なッ、何を……」

「結局デメエ」

「勝手に一人で諦めて、楽な道に逃げただけだろオが。臆病だな」

だが、レンは否定した。

一人で悩んだ程度ではたかが知れる。結局の所、造物主は一人だったのだ。

だが、認められない。

自分から言い出した事とはいえ、数百年間悩んで出した答えを否定されたのだ。

いくら魔法世界を造ったとはいえ、造物主も心は人間。

人は心理学的に、おいそれとは認められない。

「違う！！私の語る『救い』こそが唯一の次善策だ！！！」

最早子供の駄々と変わらない。

その言葉と共にガムシヤラな拳が放たれ、レンの顔面に命中した。

「え……………」

それが、レンに初めて通った攻撃。だが、

「じゃア……………試してみるか？」

「なッ

」

る造物主を見付けた。

流石造物主。ギリギリだが、まだ生きている。

殺してはいない。話を聞かせる為に黙らせたのだから。

「ハッ……ハッ……、分からない……。私には……」

「だったら、一緒に見付けてやるよ。期間限定だがなア」

そう言い、レンは手を差し伸べる。

レンはいつも通りだ。

彼はいつもそうやって、誰かを救ってきたのだから。

造物主の黒いフードが脱げる。

その造物主と呼ばれた女性の顔には、涙が流れていた。

「……な、何故だ？私は計画に必要なだったとはいえ、黄昏の姫御子を……」

「コンだけスタボ口雑巾にしたんだ。充分だ」

「……………」

造物主が、レンの手を取ろうとした時

ドズンッ！！！

「！？」

「ぐあああッ！？」

その手は、一つの槍に貫かれた。

勿論、やったのはレンではない。

なら誰がやった？アンリ・マユ？

だが、即座にそれを否定する。

アンリ・マユには大した攻撃力が無い。

アルトリアに勝てたのは、自身の受けた傷を、ウェルグ・アウエ『偽り写し記す
スタ』スタで相手に返す事が出来たからだ。

なら一体誰だ？

その答えは、すぐ分かった。

「
地を這う虫ケラ風情が、誰の許しを得ておまて面を上げる？」

「退がってください！レンー！！」

アルトリアの声が、響く。

レンは咄嗟に後ろに飛び退いたが、レンのいた場所、

つまりは、造物主が、宝具の原典の雨に貫かれ、絶命する。

「宝具の原典だと！？しかもあの量、まさか」

レンは、宝具が放たれた方向へ振り向く。

そこには漆黒の逆月があった。その穴の様な月から、雫の様に泥が垂れ流れている。

その月の近くに、黄金の鎧を纏った者がいた。

そしてその者の名を、その穴を、レンは知っている。そして、何故此処に居るのか直ぐに分かった。

「黒化無しか……呆れるぜ」

大聖杯へと繋がる穴、そしてその黄金のサーヴァントの名は

「貴様は我^{オレ}を見るに値わぬ。虫ケラは虫ケラらしく、地だけを眺めながら」

「ギルガメツシュ……!!」

「死ね」

黄金のサーヴァント（後書き）

先生陣アンケートに変化アリ。

刀子五票

シヤークティ五票

しずな三票

さーて、紅き翼ガン無視きめてるレンですが、紅き翼ファンからの批評が恐い。

次回、第五次聖杯戦争のサーヴァントてんこ盛りバトルです。

感想やアンケート待ってます。

レンの宝具の詳細。

太陽神の子カルナ。

インド神話「マハーバーラタ」に登場する英雄。

物事に一切干渉しようとしないため、一見無慈悲で冷酷な印象を受けるが、内面は思慮深く、義理堅い人物。

しかし、その人物の言われたくない本質をズバズバ言う為、嫌われ

やすい。

ランクEXの宝具を持つチート候補

「梵天よ、地を覆え（ブラフマーストラ）」

対軍、対国宝具。クラスがアーチャーなら弓、他のクラスなら別の飛び道具として顕現する。

ブラフマー神の名を唱えることで敵を追尾する事で必中するが、呪いにより実力が自分以上の相手には使用できない制約がある。

レンが使った場合、自分以上の相手がいないため消しました。

凄王（前書き）

……やっちゃったぜ；、（

凄王

side三人称

どの並行世界にも、基本二つの抑止力が存在する。

一つ目、アラヤの抑止力。

霊長であるヒトの、破滅を回避しようとする無意識から生まれたヒトを監視して管理する神のようなもの（ただし概念なので意思も実体も持たない）。

ヒトが破滅、もしくは自滅しそうになると現れ、その原因を抹消する。

大抵の場合は一人の人間に抑止力の補正が働き、人類を破滅から救う。

そしてその人間は“英雄”として扱われる。このように、抑止力によって英霊になった者も存在する。

かのエミヤシロウがそうだったように。

そしてもう一つは、ガイアの抑止力。

こちらは地球を司る抑止力で、自然などが破滅に向かう際に発生する。

アラヤよりは大規模なため、発生はしにくいのが、発生すれば不味いことになると思われる。

ある意味では地球の意思そのものとも言える。

その二つから、アンリ・マユは掻い潜った。

魔法世界が滅びようと、元は火星。しかも実質火星に自然は極小、地球に何ら影響は与えない。

つまり、ガイアは働かない。

魔法世界が滅びようと、”人間”の死人は6700万人程度。アラ

ヤも働かない。

唯一働く抑止力は、新たに生まれた三つ目の、管理者から選ばれた守護者に酷似した名も無き抑止力。

世界の異物を基本排除、極稀に適用させる。

だが、既に大量の異物に手一杯。

自身を誕生させるのに、これ以上の環境は無い。

アンリマユがこの『世界』を選んだのは、大いに納得出来る。

この世界を選んだのは、別の理由が有ったとしても。

出現した漆黒の逆月。大聖杯へと繋がる穴。

蒼銀の騎士王と黄金の英雄王。対峙しているのは、二人だけではない。

紅い魔槍を持つ青装束の男。ケルト神話における大英雄、アイルランドの光の御子たるクー・フーリン

紅と黄の双槍を持ち、右目の泣き黒子がある美麗の男。フィオナ騎士団の随一の戦士、“輝く貌” デイルムツド・オディナ。

鋼色の筋肉で堅められた二メートル越えの大男、ギリシャ神話の大英雄ヘラクレス。

「フム、まともに意識がある者は英雄王と自分だけようだな。いやはや、この身も捨てたものではないな」

紺色の陣羽織に長大な太刀を帯びた耽美な青年。
架空の英雄、佐々木小次郎。

ただ、佐々木小次郎とギルガメッシュ以外は、目に光が無い。しかし黒化とも違う。

狂化だ。

おそらくアンリ・マユが召喚したのだろうが。

大聖杯の中には彼等の魔力が吸収されている。呼び寄せる事は可能だ。

アルトリアは、レンとパスを結んでからは記憶ではなく、知識を得ている。

その知識の中には彼等の物もあり、アルトリアはあの穴の危険性とサーヴァント達の脅威度をよく知っている。

だが今のアルトリアにとっては、その総てが些事を感じてしまう。

今は自分の主マスターが何より心配だった。

そう、レンは見てしまったのだ。

穴のような漆黒の逆月を、まるで杯の器のように支えている、縛られている、

アスナを。

その精神的衝撃ダメージが何れほどモノか、レンがどのような人格なのかよく知っているアルトリアには、容易に想像できる。

自分が不在だった為に、アスナを拐われアルトリアに重傷を負わされた。

その事がレンに何れほど自責の念を抱えているか。

今のレンの精神は崖っぷち状態だ。

彼が冷静だったなら、ある違和感に気付いたのだが。

そして、

その精神的衝撃はギリギリに留まっていたレンの留め金を外すのには、充分だった。

「アルト

」

その一言で、その精神状況を彼の従者は正しく理解し、思わず唇を噛む。

「長くは保たねエぞ……………」

「……………ッ、分かって……………います」

カチッ

どこかで「音」がした気がした。

何かが組上がってしまったような、歯車が軋み合うような。

……………そんな「音」が。

瞬間、空が龍に覆い尽くされた。

それと同時にギルガメッシュから大量の宝物が殺到し、

その全てがレンに命中する。

「レンッ！！！」

ギチッ、ガチガチッ、バキンッ！！

だが、その全ての宝具が噛み砕かれた。

砕いたのは、まるでそこに潜んでいたかの様にレンの服から這い出てきた獣だった。

彼の肌は深々な、黒に近い赤銅色へ。

その眼球は黒く染まり、その瞳は揺らめく焰のように、血よりも深

「 ”虹起つ掘掘りて神鏡を得る”……か」

アサシンが何故、日本書紀の雄略紀の一節を口にしたのか。

おそらくは、佐々木小次郎という伝説が作り上げた、伝説そのものである彼だからこそ、口にしたのかも知れない。

虹とは古の古龍、蛇のこと。そして神とは………蛇身。
この世の全ての気がその身に集まり、蛇の姿を以って繋がる。

その目は蛇身の如く、その尾は刀の如く、その髪は蛇玉の如く。

「……………m u g g e p t w 破壊 T e m q h a t」

「 ツ！！！！！！！」

最高の神性を持つヘラクレスが、何かに気付いた様にレンに突っ込

む。

その第五次聖杯戦争にてアルトリアを圧倒した暴力がレンを蹂躪する為に、その斧剣で叩き潰す為に、降り下ろされる。

ドゴオオンッ！！！！！

「レンッ！！！」

「余所見をしている暇など無いぞ！！」

「くっ……、そこを退けッ！！ギルガメッシュユ！！！！」

アルトリアがレンに向かうが、ギルガメッシュユに阻まれる。

バーサーカーの斧剣は、レンに届くことなく、黒翼によって粉々に砕かれた。

そのまま黒翼はヘラクレスを襲う。

「

！！」

その黒翼を、ディルムツドの破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルケ}で断ち切ろうとする。

破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルケ}は、刃が触れた対象物の魔力の循環を遮断する事で魔術的效果を強制的にキャンセルする。

が、黒翼を数秒しかとめることしかできなかつた。

何より、レンの両腕は止まらない。

ズドンッ！！！！

レンの拳が振るわれ、ディルムツドが吹っ飛ぶ。

本来ならばそれで死亡だが、狂化によって耐久力が上がっているディルムツドは、耐えることが出来た。

「

秘剣、燕返し！！」

「多重次元屈折現象」による、三つの斬撃を「同時」に放つ。

血飛沫が舞う。

「グッ……重いな!!」

その血は、斬った側のアサシンの腕から出たものだった。

斬られた側のレンには傷一つ無い。レンの体は鋼より堅い。

アサシンの刀で斬れなかった程に。

アサシンの傷は、レンの獣が一瞬のうちにアサシンの腕の皮膚を噛み千切ったからだ。

「……!!」

半分となった斧剣で、バーサーカーが斬りかかるが、

「……pjmdw炎神qtjdw息吹jms」

ゴオツツ!!!

地面からあらゆる物体を燃やし尽くす業火が、バーサーカーを呑み込んだ。

バーサーカーが蒸発しきってから、再生を始めるが、すぐに燃やされる。

「………」

あっという間に、ギリシャ神話の大英雄は敗れ去った。

戦いは、まだ終わらない。

淒王（後書き）

千雨 二十七票

真名二十二票

茶々丸二十三票

アキラ十八票

楓十二票

さよ九票

のどか九票

まき絵三票

千鶴五票

夕映三票

裕奈二票

古三票

玉藻十一票

メディア六票

スカサハ一票

サーヴァントの時並列がグツチャグチャでした。

一応誰も聖杯戦争の記憶はありませんが、ギルガメッシュは無意識にアルトリアが気になっている……………位です。

刀子五票

シャークティ六票

しずな二票

シャークティ先生が刀子先生を越えたッ !!

後、何か造物主をヒロインに入れてくれとの感想が有ったので、アンケートします。

10月27日まで受け付けます。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

ではまた次回ッ！感想とアンケート、待ってます！

勝利の剣（前書き）

大学の山のような課題で遅れました。

課題の合間にちよくちよく書いてると過去最大文字数になりました。

故に誤字脱字のオンパレードの予感、つかしています。すいません。

修正しました。

勝利の剣

side 三人称

「何なんだあれは……!?!」

天空を穿つ漆黒の逆月。そこから溢れ出す泥。

近くに堕ちてきたその泥を、一番傷の浅いゼクトが観察する。

「あの泥に触れてはいけませんよ」

「判っておるアルビレオ」

そして現れる黄金の王やサーヴァント達。

変わり果てた神^{レイン}。

それを見て、重傷の詠春とアルビレオが呟いた。

「クツ…あれは 本当にブレイドなのか……………！？それに
造物主をやった奴等……………、特にあの黄金の男は、一体……………！？」

「喋らないでください詠春！貴方が一番深手なのですから」

紅じぶんたちき翼がが万全の状態でも、あのサーヴァント達に勝てる
かどうか分からなかった。

参戦したくても、瀕死の状態の自分達では話にならない。

なによりも、彼等には今のレンが味方なのかも判別出来なかった。

だというのに、この男は何処までも真っ直ぐだった。

「アル……………、お前の魔力全部使って俺の傷を治せ」

「……何のつもりです」

「ブレイドぶん殴って姫子ちゃんを助ける」

「止せナギ!! ああなったブレイドの視界に入ってみろ!! 殺されるぞッ!!!」

両腕を無くしたラカンが、必死にナギを制止させる。確かに完全に凄王と化したレンが認識出来るのは、大聖杯へ繋がる逆月と敵サーヴァント。

本来どれだけ素養があっても、一万を超える魔を解放したら人間は一秒も保たない。

レンだからこそ、耐えられ、正気を保てるのだ。

だが、黒翼の出現でどれだけ不安定になっているか。

そんなレンの前に立てば、ナギなど蟻の様に潰される。

だが、

「……………アイツ、俺には哭いてる様にしか見えねえんだ」

「しかし一人では…ッ、俺も行く。この中では一番傷が浅い」ゼクト!?」

「お師匠…」

「ナギ……分かりました。とは言えそんな無茶な治療では三十分が限界ですよ?」

「ハッ、三十分ありや充分だ。俺は最強の魔法使い、千の呪文の男サウザンド・マスターだぜ」

ナギはそう言い、ゼクトと共に戦いの中心に向かった。

「よもやバーサーカーが圧倒されるとは……」

バーサーカー、ヘラクレスの消滅。

だが、それは仕方がない事だった。

彼とて黙って殺された訳ではない。本来バーサーカーには12個も命を持ち、更に一度殺された武器なら耐性が付く。

それが一方的に殺られたのは理由がある。

透化させた『エルキドゥ天の鎖』で縛り上げられ、『アグニッシュ・ワックス炎神の息吹』で燃やし尽くされた。

「神を律する」と謳われる鎖。

数少ない「対神兵装」のひとつで、相手の神性が高い相手ほど制約・拘束力が高まるというもの。

バーサーカー　ヘラクレスの神性は最高ランクのA。ヘラクレ
スに、逃れる術は在りはしない。

その全く身動きがとれない状況で、分子の超振動で体を破壊され続けた。

いくらヘラクレスとはいえ、どうしようもない。

「流石は武神。バーサーカーを一瞬で屠るとは……、クイフリーン奴も運がない。これ程の強者を相手に正気でないとはいな」

アサシンの言葉に反応したか、クイフリーンの連撃がレンを襲う。

しかし悉く当たらない。

「……………」

最速のサーヴァントたるランサーの槍が全く当たらない。

これ以上は無駄と判断したのか、レンから距離を取り、槍から刺すような魔力を放出して構える。

「『刺し穿つ』ゲイ」

「

それは、相手の心臓に槍が命中したという結果を作り上げてから槍を放つという因果の逆転現象を起こす、クーフリーンの必殺ほじくの刺撃。

いくら体が硬くとも、どれだけ回避能力や、反射能力があるうと、防ぐことは出来ない呪いの魔槍の一撃。

「
『死棘ホルケの槍』！！！！」

その槍がレンの胸を貫いた。

「
、
」

いかに世界のバックアップがあっても、心臓を貫かれたらひとたまりもない。

「 カカツ 」

そう思っていた。

ガシッ！！

「 ツ！？ 」

狂化されたランサーの顔に、驚愕の色が浮かぶ。

槍を掴む腕を軋むほど握り締め、レンは口の端を歪めて凄惨な笑みをつくった。

「 雷霆 r k m e p w 槍 」

空いているレンの右手から、緑色の槍の様な炎を作り出し、ランサーに向かって、

「零距离で撃たれた。」

「チイツ！何故当たらぬッ！！」

「……………」

大量の宝具の原典を持つギルガメッシュは、攻めあぐねていた。

確かに、ギルガメッシュの宝具の雨は強力だ。アルトリアと云えど、まともに喰らえばじき捌ききれなくなる。

だが、アルトリアはそれを相手にする気が無い。

縮地と魔力放出を併用し、ギルガメツシュの周囲を縦横無尽に駆け回る。

レンから無限に等しい魔力供給が正常に行われている今、魔力切れの心配がなくなっている上、全てのステータスがかなり上昇している。

特に直感が、レンの龍眼並の未来予知になっている。

そんなアルトリアに、狙撃の才能が無いギルガメツシュが当てられる訳もない。

「ハアアアッ!!!」

「何ッ!!!」

遂にアルトリアは、魔力放出を全開にして完全にギルガメツシュの視界から消えた。

「チッ、この我^{オレ}を煩わせるかッ!」

ゲート・オブ・バビロン
『王の財宝』 宝具の排出を止め、自分の全方位に防御宝具を展開する。

「『爆ぜよ、インビジブル・エア風王結界』！」

「痴れ者が、オレ我の上に立つなッ！！」

ギルガメツシュが上方に視認したアルトリアは、既にその剣に纏わせた風で、爆風を作り上げていた。

「ストライク・エア『風王鉄槌』！！！！」

ギルガメツシュは防御宝具全てで防ごうとするが、いきなりの一撃に宝具の壁の隙間を狙われたのだ。完全には防ぎきれず、稼げたのは一瞬の時。

だが、その一瞬で充分だった。

ギルガメツシュの口は笑みで歪む。

「天の鎖よ！」

「な!？」

一瞬の隙をついて天の鎖でアルトリアの足を絡め、エルキドゥ宝具の雨を浴びせる。

「クッ！」

アルトリアは咄嗟に体を捻らせ鎖を解き、虚空瞬動で回避するが、幾つかの宝具が体を掠め、吹き飛ばす。

「ぐあああッ！」

空中を飛び、最早崩壊が起きるのは時間の問題になっている墓守人の宮殿の外壁に叩き付けられる。

見えるのは、高く伸びた黒い翼。

聞こえるのは咆哮と破壊音。

「レンッ……………!!」

アルトリアには、その咆哮が、慟哭にしか聞こえなかった。

泣き声にしか、聞こえなかった。

「早く、レンの元にッ……………」

「頑張るねエ、騎士王サマッ」

「!!!!」

立ち上がったアルトリアの前に、大量の泥が落ちる。

咄嗟にアルトリアが避けた泥は人の形をとり、

「アンリ・マユ……!!」

そこに、元凶が現れた。

アルトリアは警戒を強め、周りにも視野を向けている。

アンリ・マユの戦闘力は対英霊としては最弱。

問題はギルガメッシュだ。アレの性格からして、騎士の誇り等持ち合わせてはいないだろう。

「……………貴様」

「あ、言うておくけど、話してる最中にズバンは無し

」

明らかにアンリ・マユはアルトリアを揺さぶっている。

「もしレン^{アレ}を止める手を貸すなら　　「いらん　　……へエ、
もっかい言ってくれるか？」

「何度も言わせるな下朗！私にそのようなものなどいらんと言った
のだ！！私が欲しいのは彼^{レン}だけだッ！！！！」

それが今のアルトリアという”人間”の想い。

自分の命を助けてくれた、自分を救ってくれた彼の剣に成り、側に
いると誓ったからこそアルトリアはここにいる。

「……………そのご主人サマはあんな状態でもか？」

「ならば今度は私がレンを救う番だ！」

アンリ・マユの問いに即答で返す。アルトリアの目に揺らぎは微塵
も無い。

「……………プツ、ハハハハハハ！」

「何が可笑的い！」

「ああ、悪い。いやあセイバーも女の子やってんなーと思ってよ…でもイイのかよセイバー、そんな堂々と愛の告白ブチ咬まして？」

「え？……………あ……………、ハアアツ！！／／／」

「アブねえー！！」

今更自分の言った意味を理解したからか、又はアンリ・マユにかわられたか、アルトリアの顔が真っ赤に染まり、アンリ・マユに斬りかかった。

「アステ 姫つちとオレ 聖杯は完全なラインは出来てねえ。聖杯を破壊しても姫つちには問題はねえ。聖杯の泥のろいにやられてるかもしねえが、お前のご主人サマなら治療可能だろ」

「！！？」

さっきまでのふざけた顔が、真剣な表情に一変して言い放ち、その言葉にアルトリアは驚愕した。

コイツは今、一体何を言った？

まるで、自分が消滅する事を前提に話している様な。

「どづいづ意味d『ズドドドドツ！！！！』 ツ！」

「このようなくだらぬ問答に我の時を割くとはな。貴様は端末なのだから潰しても構わんのだろう？」

アルトリアはギルガメッシュの宝具の雨を叩き落としたが、アンリ・マユは撃たれ、泥に帰った。

その時、

ズアアアアアアアアアアアツツツ！！！！！！！！！！

「
ッ！！」

碧色の火柱。それにより、墓守人の宮殿が崩壊を始めた。

アルトリアは驚愕し、ギルガメツシュは目をやり、細めた。

「チツ、殺られたか。所詮雑種、時間稼ぎにもならんとはな。まあいい、どのみちあの蛇は我が殺^{オレ}してやるつもりだ」

その一言で、アルトリアの殺気の濃度が跳ね上がる。

「という訳だ。残念だがこれ以上お前に構ってやれん。幕引きといくぞセイバー」

「幕を引くのは私の剣だ！ギルガメツシュッ！！！！」

ギルガメツシュはエアを構え、魔力を充填させる。

アルトリアもそれに対抗するために、黄金の光を収束させた剣を構える。

人の望みによって作られながら、人の意思に影響されず生まれる。

天地開闢以前、星があらゆる生命の存在を許さなかった原初の姿、地獄そのもの。

対するは、人の想いと星が鍛え上げた最強の幻想。ラスト・ファンタズム空想の身でありながら最強の座に在る聖剣の頂点。

「『エヌマ天地乖離す』

「『エクス約束された』

最大出力で放たれた。

「『カリバー勝利の剣』！！」

「 エデنزスシード、解放!!! 」

「 何イ!?! 」

アルトリアの瞳に『ステイグマータ聖痕』が浮かび上がる。

それに呼応して、『約束された勝利の剣』の威力が跳ね上がり、まるで斬った様に『エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星』が裂ける。

アルトリアはレンと本契約し、治療した時に念には念をと『エデنزス神の細胞』を移植に成功させたのだ。

そしてアルトリアに宿った力は『切断』。

物質、概念、現象、事象問わず、ありとあらゆるモノを斬る能力。

名付けるなら、『フレイド斬』の欠片。フラグメント

『ツエアライセン・総てを斬り裂く勝利の剣』カリバー。

「ガアツ……ハツ……！！？」

ギルガメツシユは『エヌマ・エリシュ天地乖離す開闢の星』ごと斬られた。

戦いは、アルトリアの勝利で決まった。

勝利の剣（後書き）

千雨 二十九票

真名二十二票

茶々丸二十四票

アキラ十八票

楓十二票

さよ九票

のどか九票

まき絵三票

千鶴六票

夕映三票

裕奈三票

古三票

玉藻十一票

メディア六票

スカサハ一票

刀子七票

シャークティ八票

しずな二票

造物主ヒロイン化アンケートは賛成十二票反対0票で、ブッチ切りでヒロイン化が確定しました。

アルトリアのフラグメントは無理矢理だったので、アドバイス送ってくれれば幸いです。

大戦期早く終わりに！

感想待っています。

終局（前書き）

主人公がラスボスみたいになってしまったッ。

またもやご都合発動。自分の文才の無さに泣きたくなる。

例によって誤字脱字があると思います。

終局

side 三人称

巻き起こる爆風がおさまった中、レンは立っていた。

黒翼を纏ったレンの前には、片腕を焼ききるといふ代償で、クーフーリンは生き残っていた。

「今のを腕一本で凌いだか……流石だな、クランの猛犬よ」

「ハッ、伊達に英雄名乗ってねえよ。サムライ」

その目に正気を取り戻して。。

「『都合主義だな』この世^{アイツ}全ての悪」

「アレに言っても仕方あるまい」

召喚者？に対してボロクソだが、狂化されていたので敬意が欠片もない。

レン本人の穿たれた胸は、即座に再生していく。

「……………よくアレから逃げ仰せたな」

「『ゲイ・ボルク刺し穿つ死棘の槍』は食らったら一撃必殺なんだがなあ……………。反則だろ。まあ、逃げられたのはアイツのお陰だ」

ランサーが親指を指した方向に、全身を黒い騎士甲冑に覆われているサーヴァント　　サー・ランスロットがいた。

ランスロットは、レンの『ランサー・デル・レインバーク雷霆の槍』が放たれる前に軌道を変えたのだ。

ランサーの腕は焼ききれているが、自身のルーン魔術で充分治療可能範囲。

即座に治療した。

「フム、加勢か。有り難い」

「よう、助かったぜ湖の騎士」

「構わない、光の御子。彼には言いたい事があるのだが、今のままでは話も糞もないだろう」

「つつか、何で最初から居なかったんだアンタ？」

それが一番の疑問。何故最初からいなかったのか、何故狂化していないのか。

「私は君達とは別口でね。彼を落ち着かせるのと、アレを何とかするのが仕事だ」

ランスロットはレンを見た後、首を振って逆月を指し、クーフリーンもなるほど、と納得する。

「俺としちゃあ、一騎討ちがしたかったんだが、助けられた手前、あんまデケエ事言えねえか。まあなんだ」

ランサーはレンを睨み付け、心の底から歓び震えていた。

「やっと正気で戦^ヤれるんだ、楽しもうぜ！！武神ッ！！！！！」
槍を構え、走りだす。

それに準じて、ランスロット、佐々木小次郎とディルムッドも攻める。

四人もの武術の達人の英霊よる全方位攻撃。

レンはディムルッドの破魔の紅薔薇以外の攻撃を黒^{ゲイ・ジャルケ}翼で蹴散らし、ディムルッドには肉弾戦で対応した。

ハッキリ言って蹂躞に等しい程の戦力差だった。

「ぐっっ……」

「ハッ……」

ほんの数秒の攻防で、四人はボロボロだ。

ランスロットは鎧も所々が破損している。

クーフリーンと小次郎、デイルドは口や額から血を流し、手足以外の骨も確実に折れている。

だが、英霊達は倒れない。

そんな時、不意にレンが右手を上げた。

瞬間、

上空を覆い尽くしていた龍の鎌首が、墜ちてきた。

龍^{それ}を拳で喰らう

「ggd wu 喰 pnd hbt」

「これ以上…更に外気を喰らうか……！」

「チツたあ自重しろってんだ！」

「ッ！！」

ドンッッ！！！！

喰らい終えたと同時に黒翼がうねり、大気が震撼する。

レンの姿形は変わっていないが、さっきまでのレンが赤子に見えるほど、龍を喰った事で成長していた。

「神格跳ね上がってるぞオイ！」

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザッッ！！！！

レンは身を屈め、クーフリーン達に向かって駆ける。

戦いを観ていた紅き翼達には、消し飛んだとしか見えなかった。

英霊達と互角に立ち回れる紅き翼達が。

知覚加速^{オーバーレブ}というのを知ってるか？

ある種の緊張状態や生命の危機に瀕すると脳は視角以外の全ての情報をシャットアウトし通常より多くのコマ数を知覚するようになる。

人間が一秒間に目で捉えられるコマ数の数倍の視覚情報を得ることで、思考の速度と運動の速度が桁違いに離れてしまいまるで時が止まった様に感じる現象を引き起こす。

代表例が走馬灯だ。

だが加速された知覚に、体は全くついていけない。

その現象が四人には起き、視ることが出来た。

レンの姿。

そして黄金に光る鞘を持つ、騎士王の姿を。

「『アウマロン 全て遠き理想郷』！！」

アウマロン 全て遠き理想郷。

アーサー王伝説における常春の土地、妖精郷の名を冠した『約束された勝利の剣』の鞘。

そして、主からマスターアーティファクトという形で再びアルトリアに現れた鞘。

「この世界における最強の守り」と形容されるが、正確には防御というレベルではなく遮断。

分解した鞘に包まれた対象はその瞬間のみ、妖精郷の壁によりこの世から隔離されることで、この世の理全てから断絶される。

その結果、あらゆる物理的・魔術的干渉は勿論の事、五つの魔法、並行世界からのトランスライナー、多次元からの交信も六次元まで遮断する。

何者にも侵害されぬ究極の一であり、真の魔法の域にある宝具。

それが、迫り来るレンの拳を止めた。

バキンッ！！！！！！！

レンは、弾かれる様に後ろに飛び退いた。

「フウ、助かったぜセイバー」

「貴方を守ったわけではない。過去に、私の無力のせいで喪った臣下を守ったのだ」

「アーサー王……ッ」

『ベジータ発見ッ』

いや、作者は違うと思うわマンリ・ママ。

「……………」

黒い翼がアルトリアを除く四人に襲い掛かった。

「「「「ツ！！！！」「」「」「」

先程とは、速度や範囲が段違いだ。いかに英霊と云えど、かわす事は叶わない程に速い。間違いない殺られる。

邪魔が入らなければ。

「」
『キリブル・アストラペー
千の雷』！！！！」

レンに、ナギとゼクトの雷系最大呪文が殺到する。

無論、レンは黒い翼の一翼で防いだ。が、片翼では英霊四人は殺せず避けられる。

「貴様は……」

「何用だ、少年？」

「アンタ等に頼みがある
アイツを一発殴らせてくれ」

「……………は？」

アルトリアは、ナギの発言に呆然とするが、

「へエ、乗ったぜ坊主」

「武神を殴らせるとは、中々に豪快な頼みだな少年。よかろう、この佐々木小次郎も引き受けた」

「ちよつ…！？」

「アーサー王、ここは彼に賭けましょう。彼の父君である彼を」

「！？」

アルトリアが反論しようとしたが、ランスロットが周りに聞こえない様に言った、爆弾発言で止めた。

「まさか……本来の時間軸とは！？しかし、何故貴方がそれを……
!?」

「騎士王。問答はいかんとは言わぬが、彼方あいつの御仁　　いや、御神は待つてはくれぬぞ？」

「!?!」

小次郎の言う通り、レンはアルトリア以外に向かい、拳を振るう。

全て遠き理想郷アウマロンに護られているにも関わらず。

間違いなく、レンはアルトリアを傷付けたくない。それだけわかれば、少しきっかけを与えれば暴走は止まる！

「　　避けるよ又シ等!!」『重複、千の雷キリブル・アストラペー』!?!」

ゼクトは持ちうる最強クラスの呪文を出す、そんなものであの拳を止められないのは百も承知。

黒翼すら使わずに、『千の雷』は拳に触れた瞬間消えてなくなる。

そのまま拳は止まらず、着弾する。

バキインッ！！

『千の雷』で視界を塞ぎ、
アウァロン全て遠き理想郷で拳は防がれ、後ろから小次郎とクーフリーンが、
それぞれの必殺を構える。

「秘剣

」

「『ゲイ・突き穿ッ』

」

無論、黒翼は反応し。二人の首を刈り取る鎌の様になぎられるが。

ディムルツドの破魔の紅薔薇とランスロットの『無毀なる湖光』アロンダイトが
一瞬の間、黒翼を止める。

「

『燕返し』！！！！」

」

「
『死翔ボルクの槍』!!!!」

必殺が放たれた。

だが、

「何!!!?」

燕返しの三連撃は、レンの髪が連結剣のようになり全て防がれ、
『突き穿つ死翔の槍』は、レンの体の中から這い出た獣に防がれる。

だがこれで、ナギは懐に入ることが出来た。

「!」

「
いい加減、目エ覚ましやがれエエエエッ!!!!」

レンの顔面に、ナギの拳が突き刺さった。

黒翼も霧散し、肌が元に戻る。

ガシッ。

「はがッ!?!」

決まっただけな図だったが、殴ったナギの顔面は即座に鷲掴みされ、

「フンッ!?!」

ドクシャアッ!?!

「~~~~~ッ!?!?!」

人間の頭蓋から、決して鳴ってはならない効果音を発しながら、レ

。んのヘッドバットがナギに直撃し、ナギはそのまま崩れ落ちる。

「……まさかオマエに助けられるとはなア（黒歴史確定だなア）」

何時ものレンがそこにいた。

「レン！！」

「……アルト………悪いな、かなり迷惑かけちゃったみてェだ」

「いえ、^レ無事で……何より……！」

アルトリアは、とても安心した表情を浮かべる。

本音を言えば、すぐにレンに抱きつきたいが、レンは逆月とアスナを見据えている。

レンにはまだやることがあるのだから。

すると、悶絶していたナギが復活した。

「痛つてえ……！何しやg」で、あの穴どうやって塞げられるのじや？」

「聞けk「それは俺がやるが オマエ等、止めねエのか？」

レンはサーヴァント達に問う。

「構わなねエよ。あの金ぴかは兎も角、俺達の目的は強者との戦いだ」

「もとより仮初めの身、だが最後に武神と手合わせ出来たのだ。これ以上の幕はあるまい」

何より、と付け加え。

「^{スカー}お前さん（お主）に完全に滅ぼされるのが、『^マこの世全ての悪』の目的だしな（なのでな）」「

「！！？」

「……………やっぱりなあ」

驚愕明らかなアルトリアに対して、先程の暴走が嘘の様に、レンは冷静だった。

そう。違和感の正体はコレだった。

もし本気で受肉したいのならば、アスナを器にするのではなく融和する方が確率が高い。

レン達は、アスナに攻撃出来ないのだから。

だが『この世全ての悪』はそれをしなかった。

『この世全ての悪』は受肉したかったのではなく、死にたかったのだ。

この世界を選んだのもそれが最大の理由。

自身を完全に滅ぼせる存在がいたから。

大聖杯の中身全てを、完全に滅ぼせる者を。

レンはカルナを取り出し、『この世全ての悪』を殺せる唯一の切り札を切る。

「……………エデنزシード、解放」

それは、神々をも、『この世全ての悪』をも打ち倒す光槍。

「いくぜ、クソ傍迷惑自殺願望者」

『来いよお人好しテイナー』

雷光でできた必滅の槍が放たれる。

対神宝具

「ヴァサヴィ・シャクテイ日輪よ、死に随え」

槍は穴に真っ直ぐ向かっていき、彼を殺した。

穴は塞がり、器になっていたアスナはそのまま重力に従い落ちるが、レンが受け止める。

その日、偶像として選ばれてその一生を魔として扱われ、人々が呪いを押し付けただけの被害者は大聖杯に戻る事もなく、英霊の座に還る事もなく、

輪廻の輪に還ることが出来たのだ。

終局（後書き）

アスナー―確定者

木乃香―確定者

刹那―確定者

エヴァ―確定者

アルトリア―確定者

アリア―確定者

キャスター―確定者

千雨 二十九票―確定者

真名二十二票―確定者

茶々丸二十四票―確定者

アキラ十八票―確定者

先生陣―確定者

造物主―確定者

楓十二票

のどか十票

さよ九票

千鶴八票

まき絵三票

夕映三票

裕奈三票

古三票

キャスター―候補

玉藻十三票

メディア七票

スカサハ一票

先生陣候補

刀子七票

シャークティ八票

しずな二票

サブヒロインが多すぎる為、サブヒロインだけでアンケートとるかもです。後一人くらいです。

感想アンケート待ってます!!

あとがき訂正しました。

不滅（前書き）

急展開？造物主をヒロインで原作いくには、コレしかなかった……。
……。

不滅

side 三人称

この世界に『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』
ト達は、魔力になって霧散した。

マスターを失ったサーヴァン

「
ッ！？」

しかし世界の物語は、何も終わっていなかった。

そう。レンは、『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』に気を取られ過ぎたのだ。

故に、忘れていた。

見逃していた。

失念していた。

造物主の不滅特性を。

「ゼクトツッ!!」

標的が誰なのかは分かっていた。

この中で乗っ取る一番体の相性が良いのは、不老のゼクトだ。

ナギやアルトリアも振り向くが、そこにゼクトは居らず。

「よくも……よくも我が依り代を、我が娘を殺してくれたな……!!」

「し、師匠……?」

「チッ……!!」

ナギが困惑の表情を浮かべ、レンが忌々しげに舌打ちする。

「なあ！どうしちまったんだ師匠　「やめる。アレはもうゼクト
じゃねエ」　！？」

ナギが騒ぎ出す前に、レンが止める。

そこにいたのは、もうゼクトではなかった。

「やっぱりアイツはアマテルだったか。アイツ自身も否定してなかつたしなア」

初めてレンが造物主に会った時、レンは造物主をアマテルと呼び、造物主は否定しなかった。

アマテルは、造物主の娘であるというのに。

「……人間は救いきれぬ。なら、救われなかった人間は何を持って救われる？」

「あん時の言葉はオマエか。アマテルは理解出来てたが、オマエは

年喰ってる割には、随分頭でつかちの糞餓鬼みてエだな。造物主」

「何!？」

ナギは驚愕を露にするが、二人は知ったことではない。

「それ以前に、この汚く、醜く、下衆で蒙昧な人間共。そんな人間とは、身を捨ててまで、救うに足るものなのか？」

「そういう話は、アラヤかガイヤ辺りにしろ。俺の知った事か」

「……」

全く会話にならない、神と幻想を造り上げた者のやり取り。

そして大分裂戦争は、造物主が煙の様に消えていくという結末で終わった。

「オイ！ブレイド！！どついう事だよ！！？」

「アルト、アスナを」

「は、はい。しかしレン、今は……」

「答えるよ、テムエ……！」

「悪イがそれは後でも説明が出来る。先ずはこつちだ。だから喚くな鬱陶しい」

造物主ゼクトが消えてから、ナギはレンを問い詰め様としたが、レンはそれを無視してある場所に向かった。

始祖アマテルの遺体の元へ。

「オイ、ブレイド。ソイツは……」

レンは、遺体の胸に手を置き

「……………今なら、まだ間に合う、か」

レンが最も使いたくない。否、絶対使わない異能（チカラ）を使う。

ピシピシ……………。

「……………っ」

「な！？」

始祖アマテルの遺体が生き返っていく……………。

「な、何したんだよ……………！？」

「見たら分かるだろう、

生き返らせてんだよ」

レンの発言に、ナギは絶句する。

レンは平然に言い放つが、それはあらゆる魔術師、陰陽師、魔法使い、異能者の禁忌中の禁忌。

同時に人類史上最も欲せられた、理を犯す大奇跡。

死者蘇生。または反魂。

レンに言わせれば、異能

『焰龍の龍門』チャクラ。

蘇生能力の一種であり、龍門を回転させ氣の雲散を防いで死の時間を止め、生き返らせる。使い方次第で永遠の命を与えられる力。

死を操る能力。

普通なら死者蘇生は、いくらレンでも世界の修正力が働く。が、アマテルは最大の異物イレギュラーに殺された。

本来の死に方を、異物によって妨げられた者は、更なる異物と認識され、害意が有るなら抑止力に排除される。

レンからしてみれば、アマテルには充分世界に適性がある。

レンが聞けばブチギレるが、どれだけ悪を語っても、どれだけ悪役がっても。

結果的に、最終的に、レンはお人好しなのだ。

「……………わ、私は……………」

「魂がまだ不安定だ。今は眠れ」

アマテルの目に手で塞ぐだけで、眠らせる。

「……………レン、アスナが……………」

「分かってンよ」

アマテルを治療した後、ナギに見られないように方舟の安静室に転移させた。

s i d e l e n

アスナは、アルトに預けてもうこの場から離れてる。おそらくアスナは一時的に聖杯の器だったから、確実に侵食されているはずだ。

379

アスナの治療にはエデンスシードの移植と魔力パスの構築が必要か……。移植には最低、粘膜接触の必要……が……俺はロリコンじやねエツ!!!!!!

ナギも後で説明すると約束し、アリアドネーが既に行っている紅き翼のメンバーの救助に向かった。

一人残ったサーヴァントのランスロットも、存在が薄くなりつつある。アルトとは、既に話を終えているみてェだ。

「淒王殿」

「……………んだ？」

斬りかかってくるか？と思ったが、頭を下げて来やがった。

吃驚したぜ、普通に。

「……………ハア、何してやがる」

「王は……………王であろうとし、己の存在を消してでも、国を救おうとする完璧な王でした。しかし、同時に王は自分たちと同じ人でもあった事を、貴方に教えられた」

「……………」

「貴方のお蔭で、王と話す機会を得られた。有難う、感謝します」

「感謝は俺じゃなく、『アイツ』にしるよ。『アイツ』なんだろう？オマエを此処に送ったのは」

「！ 知っておられましたか」

当たり前だ。『この世全ての悪』

聖杯の誕生と、俺の暴走。

管理者の『アイツ』なら、一回限りの守護者くらい出せんだろ。

「つか、あんな質の悪イモンの侵入許しといて何の援護ねエンなら、職務怠慢でキレルぞ」

ランスロット、苦笑すんな。

調整は俺の仕事だが、管理は『アイツ』の仕事だ。

丸投げでしたじゃア、リアル八墓村確定だ。

「……では、王を頼みます」

「判ったから、イイから早く帰れエ」

ランスロットは苛つく程清々しい笑顔で消えていった。

誰も居なくなつた墓守人の宮殿後で、レンは呟いた後、

「……チツ、次はアスナの治療か。オスティアは墜ちねエが、あの老害の事だ、自分達の罪を母さんアリカに擦り付けたら。証拠もまだ不
充分だ」

「だがなア、母さんアリカの処刑を実行した時が……」

あのウンコクズ共の最期だ
。

そこにはもう、誰も居なかった。

決戦の後、紅き翼は神の再来と共に世界を救った英雄と呼ばれ、指
名手配も取り消された。

元老院は神の再来ザ・セカンドを利用する為に動くこととしたが、本人の「自分は『立派な魔法使い』では断じてない」という発言が既に広まっていたため、出来ず。

当初の予定通りにアリカ王女に罪を擦り付ける為、アリカ王女を『完全なる世界』の関与の疑いをかけ、逮捕した。

だが、オステイア崩壊が無かったためか、オステイア市民の猛抗議は勿論、アリアドネー、帝国に疑惑と反感、不信感を持ったせえまでもあった。

アリカ王女処刑まで、元老院の告発逮捕と、『天罰』と呼ばれる謎の元老院殺害事件まで、

後二年。

不滅（後書き）

アスナー―確定者

木乃香―確定者

刹那―確定者

エヴァ―確定者

アルトリア―確定者

アリアー―確定者

キャスター―確定者

千雨―確定者

真名―確定者

茶々丸―確定者

アキラ―確定者

先生陣―確定者

造物主改め、アマテル―確定者

楓十二票

のどか十一票

さよ十票

千鶴八票

まき絵三票

夕映三票

裕奈四票

古三票

あやか一票

キャスター候補

玉藻十六票

メデア十票

スカサハ一票

先生陣候補

刀子八票

シャークティ八票

しずな二票

次回は、元老院ブチ殺し回です（笑）

感想、アンケート待ってます。

アンケートはそろそろ締め切るんで。

天罰（前書き）

できたてほやほや投稿です。

なのでミス半端ないと思うんで、謝るとききます。

すいません。

天罰

sideレン

その後、^{アラルツラ}紅き翼が表彰？された。俺も捜されたらしいが、方舟に居る以上見付かる訳もなく。

アスナの治療？一応成功したが、思い出させんじゃねエ。体は6歳でも中身は成人男性だ。

ガキにキスするぐれエ何とも思わねエが、妹みてエに可愛がってた奴にキスするとか、精神的に死ぬわ。

ムララ木暦はよく平然と妹のファーストキス奪えたな。ソイツの将来考えやがれ。

アスナもアスナで顔赤らめてンじゃねエ！！息荒くなンなッ！！！！

一日以上凹んだわ。

ある程度俺が落ち着いたら、面倒だがナギに説明する為に龍眼で観て、門戸無用で捕獲。ついでにアルビレオも捕まえ、説明をする為に方舟に強制転移させた。

アイツ捕まえる為だけに『エルキドゥ天の鎖』を改造して、内在魔力値が高い奴程拘束力が上がるようにし、王家の魔力で加工して『魔法無力化』の概念を付与した。

龍眼と『エルキドゥ天の鎖』、『バミューダアスポート透』が無かったら捕まえられる気しねェんだよアルビレオアイツ。

現在は、方舟ブチ込んだせいで暴れてるナギ黙らせて説明するトコ。

「教える！！師匠はどうなっちゃったんだ！？」

「やはりゼクトに何かあったのですか…」

原作でもゼクトの話になるとテンションただ下がりだったから、バして当然ちゃア当然か。

「単的に言えば、造物主が死んでゼクトの体に乗っ取った。造物主は不滅だからな」

「不滅……つて、何だよソレ……」

造物主は不死ではなく不滅。

分かりやすく言えば、ミハイル・ロア・バルダムヨオンの『転生無限者』みてエなモンだ。

殺しても真の死はくれてやれねエ。

「殺しても別の器に入る。器を壊しても意味はねエ」

アルビレオとナギは目的アマテルがいる部屋に入る。

まだ意識はねエ。

「彼女は……？」

「コイツはオスティア初代王女、始祖アマテルだ」

「なッ

！？」

アマテルを『観た』て、大体の事情は分かった。

造物主は千数百年前に魔法世界のバクをデバツクする為、一度『再生』させているが、その時は術式に不具合があつた。

その不具合を力業で持ち直した造物主だが、その負荷が助手を務めた始祖アマテルにきて、アマテルは死ぬ寸前。

そこで造物主は自分の特性の不滅を、自分の命を引き換えにアマテルに移して蘇生させた。

その時に記憶や技術経験が継承されたんだが、継承術式は喪われちゃった。

「つまり始祖アマテルが造物主を継いだって訳だ。ゼクトの体に乗
り移った造物主のは」

「本来の造物主、という事ですね」

「アマテルの負と絶望を抱えてなア」

今のアマテルは半身をもがれた様なモンだ。回復はかなり掛かる。

予想では、目覚めるのは現代に帰ってからだろ。

「クソツー！じゃあ奴等の戦力が集まる前に」

「造物主の戦力が整うまでまだ時間があるだろうが。それともオマエは一から十まで説明しねエと分からねエタイプの馬鹿か？………
………つか、バカだったなア」

「ググ………#」

「ナギ、口でブレイドには勝てませんよ」

「手エ出しゃア勝てるみてエな言い方だなア、アルビレオ？」

「フフフ………」

ムカつく笑い方すんな。

オマエの本体『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』でブチ抜くぞ。

「ブレイド、アスナ姫は無事で？」

「無事に決まってんだろオが。誰ントコ居ると思ってんだ？」

魔力パスが繋がれば、エデンスシードを移植出来るのも分かった。

イヴ化は違エがな。

「…………ツ。お前はコレからどうすんるんだ？」

「秘密だ。話は終わったな？じゃア帰れ」

俺の問いに、アルビレオの笑みが消える。

「……魔法世界が創られた世界だと」

「アリカ王女はどうなった？」

「……父王殺し、及び『完全なる世界』との関与の疑いで、二年後に処刑が決まりました」

あのウンコクス共が……。そんなに死にてエらしい

「策は？」

「ケルベラス渓谷に落ちた所を、助け、身を隠すつもりです」

「そオか……」

甘エな。

そのままアリカ王女の情報使って元老院潰すまでやれンだろ。

ま、アリカ女王自身を助けられねエ俺が言える言葉でもねエか。

「貴方はどうしますか？救出に参加しますか？」

「参加する気はねエ。助けたきゃ勝手にすることだ」

「……判りました」

アルビレオの足下に、転移魔法陣を展開する。

「アルビレオ」

「はい？」

「元老院ろっがいの人肉ジュースって、やっぱり焼却処分しゅぶんだよなア」

「はい？」

瞬間、アルビレオは方舟外に転移された。

二年後。

アリカ王女は、秘密利に紅き翼に救出された。

元老院会議室。

「クソツ！！！！^{アラルツラ}紅き翼めツ……………！！」

そこに居るのは、アリカ王女に罪を擦り付けた者達
か、元老院のほぼ全員だった。 とう

「アリカ王女の持つ情報は、私達には危険すぎる！すぐに捕らえねば！！」

「しかし、奴等は市民に我々より圧倒的的支持を受けている。指名手配にしては、我々の立場が悪くなるのでは？」

「悠長な事を言っている場合か！？もし奴等がオスティアに向かったら……………！！」

アリカ王女に自分達の罪を擦り付け、処分しようと考えたが、ままと出し抜かれた。

何よりアリカ王女が、^{アラルツラ}紅き翼に助けられたのが問題だ。

英雄になったものをいきなり犯罪者にしたら、市民がどう動くか解ったものではない。

「^{アラルツラ}紅き翼より支持されているのは神の^{ザ・セカンド}再来だけ、やはり奴を利用出来ぬか？」

『^{ザ・セカンド}神の再来』。

魔法世界でこの名を知らぬ者はいない。
大戦、それに伴って起きた世界滅亡を止めた立役者。

更に戦争で被害があつた、または紛争が起きている地域に現れては、片っ端から解決し、国、人種を問わずに復興に尽力しており。

今や宗教すら出来ている。

確かに彼なら、^{アラルツラ}紅き翼とて敵わない。

人气的にも、実力的にも。

そんなことを訝策している今の元老院の真の内情は、一言で表せる。

そう、自分達の事しか考えていない。

故に、何も分かってはいない。何も理解、していない。

「そうだな、^{アラルブラ}紅き翼が重罪戦犯と繋がっていたと情報を与えれば動くのではないだろうか？神の子の再来なのだろう」

竜の逆鱗に触れる、どころの話ではない。

自分達の行いが、神の逆鱗をどれだけ削り取っているのかを、何も解っていない。

「上手くいけば、同行している黄昏の姫御子を捕獲することも出来るのでは」

営利と保身に駆られた者の末路など、相場は決まっているというのに。

ズバンッ！！！！

「……………？ ゴプア！！？」

突如現れた槍が、一人の議員を串刺しにした。

「……………」

「ッ！？……………」

『はっあアーい、糞野郎共オ。オマエ等元老院に天国への日帰り旅行をプレゼントしてやる。余りにもイイ所だからア、帰る気起きなくなるかもナア。』

そして響き渡る、神の啓示。

「そんな訳で、まア手始めに臨死つとけ。

『カズイクル・ベイ
極刑王』」

カズイクル・ベイ
極刑王。

それは、ワラキア公国の串刺し公の由来となった宝具。

地脈を確保しておく事で、特定の範囲の大地から大量の杭を出現させ、敵を串刺しにする。

その総数2万本。

「ヒイイッ!!」「ギャアアアア!!」

次第に数を増やす杭には、呪的な心理効果が発生し、見る者に恐怖と精神的圧迫感を与える。

レンが姿を現したら時、元老議員は一人しか生きておらず、他の者は原形すら留めていない。

「き、ききき貴、キサッ、マはッ……!!」

「オマエ等はずっと挽き肉になって壁の染みにもなってる」

瞬間、議員は思い出した。

神ザ・オロカンの再来と呼ばれる者の、もう一つの名を。

「そっちの方が、オマエ等らしいしなア」

『イノセント禁忌』。

その日、とある人物がアリアドネーと帝国に渡した大量の虚偽と不正の決定的証拠。

それを用いて元老院を逮捕する為に赴いた監査官が会議場で目にしたのは
、元老議員達のものである肉片と血。

そして血である文字が書かれていた。

『of h o f G o d 、
— d i v i n e p u n i s h m e n t , w r a t

”天罰”、と。

天罰（後書き）

不正の証拠をバラ卷いたのは、社会的に元老院を殺す為です。

直接殺した理由は、殺りたいから。

危険すぎる思考です、はい。

ヒロインのアマテルはの設定、ちよい無理があります。ヒロイン化は急遽決まったので、これが限界でした。

この作品はアマテルと造物主は別人です。

誤解無きよう。

楓十二票

のどか十二票

さよ十二票

千鶴九票

まき絵三票

夕映三票

裕奈四票

古三票

あやか一票

キャスター候補

玉藻二十票

メディア十二票

スカサハ一票

先生陣候補

刀子八票

シャークティ九票

しずな二票

感想、アンケート。待っています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1949w/>

ネギま！ ～二人目と呼ばれた男。～

2011年11月5日01時34分発行